岡山県埋蔵文化財発掘調査報告134

清水谷遺跡ほか

県営矢掛町圃場整備事業に伴う確認調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告134

清水谷遺跡ほか

県営矢掛町圃場整備事業に伴う確認調査

1998

岡山県教育委員会

1．T10溝出土の土器

2．T18出土のメノウ製石屑

3．T18出土のサヌカイト製剝片・石屑

序

本書は、小田郡矢掛町里山田に所在する清水谷遺跡ほかの発掘調査報告書です。

この調査は、県営矢掛町圃場整備事業に先だって事業予定地内にある埋蔵文化財の保護・保存のための基礎資料を得るため、平成９年度国庫補助事業としておこないました。

岡山県の南西部に位置する矢掛町は、町の中央を流れる小田川とそれに沿って通る旧山陽道によって東西の交通が盛んで、江戸時代には宿場町として栄えました。現在も市街地には国の重要文化財に指定されている本陣や脇本陣の建物が残されており、当時の面影を今に伝えています。

この度調査をした里山田地区は、この市街地の小田川を挟んだ南側に広がる広大な穀倉地帯で、現在も条里が残された水田景観が広がっています。

調査の結果、水田の西側に南北に連なる山塊の東裾を中心に、弥生時代から中世の竪穴住居や柱穴列、溝といった集落に関連した遺構と、縄紋時代以降の土器や石器などの遺物が確認されました。

特に、今回新たに確認した微高地上には、弥生時代前期後半の溝と石器製作跡などを確認し、比較的早くから集落が営まれていた様子がうかがいしれました。

これらの調査成果を収載した本書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査および報告書の作成にあたり、文化庁文化財調査官ならびに岡山県文化財保護審議会委員の先生方から種々の御教示と御指導を賜りました。記して、厚くお礼申し上げます。

また、調査にあたっては矢掛町役場、矢掛町教育委員会ならびに地権者の皆様に多大なご支援とご助力をいただきました。あわせてお礼申し上げる次第であります。

平成10年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　簸　本　克　之

例　言

1．本報告書は、岡山県小田郡矢掛町里山田における県営圃場整備事業に伴い、岡山県教育委員会が平成９年度国庫補助を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した清水谷遺跡ほかの発掘調査報告書である。

2．清水谷遺跡ほかは、小田郡矢掛町里山田1095外に所在する。

3．確認調査は岡山県古代吉備文化財センター職員杉山一雄が担当し、平成９年11月４日から平成10年１月29日まで実施した。その調査面積は410㎡である。

4．調査にあたっては、文化庁文化財調査官の小池伸彦、岡山県文化財保護審議会委員の水内昌康・近藤義郎の各氏から有益なご指導、ご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

5．本報告書の作成・執筆・編集は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて杉山が行った。

6．遺物の復元・実測についてはセンター職員の方々の協力を得た。また、遺物写真の撮影については江尻泰幸氏に、浄書は田中淑子氏の協力と援助を仰いだ。

7．確認調査・報告書作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご支援・ご助言をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

　井笠地方振興局、矢掛町役場、矢掛町教育委員会、妹尾護、武田恭彰、地元地権者の方々。

8．本報告書に関係する出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）において保管している。

凡　例

1．本報告書にもちいた高度は海抜高であり、圃場整備事業計画図に掲載されているベンチマークの海抜高を援用した。また、北方位は第1～3・57図が真北でその他は磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏約6度50分を測る。

2．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺は基本的に以下のように統一している。

遺構

平・断面　1/60・1/30

遺物

土器，1/4　　土製品・石器・鉄器　1/2

3．本報告書に掲載した遺構実測図で、土層断面図のみ掲載したものについては、図上に土層の示す方位を以下のように略して付している。

東：E（East）　西：W（West）　南：S（South）　北：N（North）

4．本報告書に掲載した遺物番号については、土器、土製品、石器、鉄器にわけて通し番号を付し、土器以外については番号の前に下記の記号を付している。

土製品：C（Cray）　　石器：S（Stone）　鉄器：I（Iron）

5．本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は、口径の不確かなものである。また、小片の土器が多いため傾きの不確かなものも多い。

6．本報告書に掲載した地図のうち、第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図「矢掛」を縮小・複製し、加筆したものである。

本文目次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査および報告書作成の経緯と体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査・報告書作成の体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 5
　第１節　調査区の設定と調査方法 …… 5
　第２節　調査の概要 …… 6
第４章　まとめ …… 27

図目次

第１図　調査地周辺の地形と主要遺跡
（1/30,000・1/300,000）…… 4
第２図　調査地区周辺の小字地名（1/8,000）…… 5
第３図　トレンチ配置（1/6,000）…… 6
第４図　Ｔ１断面（1/60）…… 7
第５図　Ｔ２平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 7
第６図　Ｔ３平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 8
第７図　Ｔ４断面（1/60）と出土遺物（1/4）…… 8
第８図　Ｔ５平・断面（1/60）…… 9
第９図　Ｔ６平・断面（1/60）と
出土遺物（1/4）…… 9
第10図　Ｔ７平・断面（1/60）と
出土遺物（1/4）…… 9
第11図　Ｔ８平・断面（1/60）と
出土遺物（1/4）…… 9
第12図　Ｔ９平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 10
第13図　Ｔ10平・断面（1/60）と
出土遺物①（1/4）…… 11
第14図　Ｔ10出土遺物②（1/2・1/4）…… 12
第15図　Ｔ11断面（1/60）…… 12
第16図　Ｔ12断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 13
第17図　Ｔ13平・断面（1/60）…… 13
第18図　Ｔ14平・断面（1/60）…… 14
第19図　Ｔ15平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 14
第20図　Ｔ16断面（1/60）…… 14
第21図　Ｔ17断面（1/60）…… 14
第22図　Ｔ18平・断面（1/30・1/60）と
出土遺物（1/2）…… 15
第23図　Ｔ19平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）… 17
第24図　Ｔ20断面（1/60）…… 17
第25図　Ｔ21断面（1/60）と出土遺物（1/4）…… 17
第26図　Ｔ22断面（1/60）と出土遺物（1/4）…… 17
第27図　Ｔ23断面（1/60）…… 18
第28図　Ｔ24断面（1/60）…… 18
第29図　Ｔ25断面（1/60）…… 18
第30図　Ｔ26平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 18
第31図　Ｔ27断面（1/60）…… 19
第32図　Ｔ28断面（1/60）と出土遺物（1/2）…… 19
第33図　Ｔ29断面（1/60）…… 19
第34図　Ｔ30断面（1/60）と出土遺物（1/2）…… 19

第35図　T31平・断面（1/60）…… 19
第36図　T32断面（1/60）と出土遺物（1/4）…… 20
第37図　T33断面（1/60）…… 20
第38図　T34断面（1/60）…… 20
第39図　T35断面（1/60）…… 20
第40図　T36断面（1/60）…… 21
第41図　T37断面（1/60）と
出土遺物（1/2・1/4）…… 21
第42図　T38平・断面（1/60）…… 22
第43図　T39平・断面（1/60）と
出土遺物（1/2）…… 22
第44図　T40平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）… 24
第45図　T41平・断面（1/60）…… 24
第46図　T42断面（1/60）…… 24
第47図　T43断面（1/60）…… 24
第48図　T44断面（1/60）と出土遺物（1/4）…… 24
第49図　T45断面（1/60）…… 24
第50図　T46断面（1/60）…… 25
第51図　T47断面（1/60）…… 25
第52図　T48断面（1/60）…… 25
第53図　T49断面（1/60）…… 25
第54図　T50平・断面（1/60）と
出土遺物（1/4）…… 25
第55図　T51平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）… 26
第56図　T52平・断面（1/60）…… 26
第57図　遺跡推定範囲（1/6,000）…… 27

表目次

第1表　トレンチ調査概要一覧表 …… 29
第2表　石器一覧表 …… 30
第3表　土製品一覧表 …… 30
第4表　鉄器一覧表 …… 30

巻頭図版目次

1．T10溝出土の土器
2．T18出土のメノウ製石屑
3．T18出土のサヌカイト製剝片・石屑

図版目次

図版1－1．調査地遠景①（北西から）
2．調査地遠景②
（北東の茶臼山城跡から）
3．T10（南から）
図版2－1．T10溝　土器出土状況（南西から）
2．T18（西から）
3．T38（西から）
図版3－1．T2（西から）
2．T3（東から）
3．T4（南から）
4．T5（西から）
5．T6（東から）
6．T7（南から）
7．T9（南から）
8．T14（東から）
図版4－1．T15（南西から）
2．T16（南から）
3．T20（南から）
4．T26（西から）
5．T31（西から）
6．T35（南から）
7．T40（南西から）
8．T41（南から）
図版5－1．T44（南西から）
2．T47（南から）
3．T48（南西から）
4．T50（南から）
5．T51（南から）
6．T52（東から）
7．発掘風景
8．埋戻し風景
図版6－出土土器①
図版7－出土土器②
図版8－1．出土石器
2．出土土製品
3．出土鉄器

第１章　調査および報告書作成の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯

小田郡矢掛町里山田地内の土井・畑中・清水谷・土生の各地区において県営圃場整備事業（担い手育成基盤事業）が計画されたことに伴い、平成８年９月、岡山県教育委員会と井笠地方振興局による協議を行った。この結果、当該地内の丘陵東裾の地区で周知されている清水谷遺跡以外に、小田川右岸の平地にある土生地区においても遺物が広く散布している状況から、事業予定地内全面について工事着工に先立って確認調査を実施することとなった。

この協議にもとづき、岡山県教育委員会では、工事施工前に遺跡の規模・状況等を明らかにし、遺跡保存の協議資料を得るため、平成９年度国庫補助を受けて確認調査を実施することとした。

第２節　調査・報告書作成の体制

確認調査は、岡山県古代吉備文化財センターが岡山県教育委員会の依頼を受け、文化庁文化財調査官と岡山県文化財保護審議会委員の指導・助言を得て、平成９年11月４日から平成10年１月29日まで実施した。

また、整理・報告書の作成は平成10年１月30日から古代吉備文化財センターにおいて調査担当者があたった。

調査・整理体制

岡山県教育委員会
- 教育長　黒瀬　定生
- 教育次長　平岩　武

岡山県教育庁文化課
- 課長　髙田　朋香
- 課長代理　西山　猛
- 参事　葛原　克人
- 課長補佐
  - （埋蔵文化財係係長事務取扱）平井　勝

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　籔本　克之
- 次長　正岡　睦夫

〈総務課〉
- 総務課長　小倉　昇
- 課長補佐
  - （総務係長事務取扱）　井戸　丈二
- 主査　木山　伸一

〈調査第一課〉
- 課長　高畑　知功
- 課長補佐
  - （第一係係長事務取扱）　江見　正己
- 主事　杉山　一雄

（調査・整理担当）

日誌抄

平成９年11月４日　現場立ち上がり。Ｔ48・49掘り下げ。
11月５日　Ｔ44～47掘り下げ。
11月６日　Ｔ36・42掘り下げ。
11月７日　Ｔ40・43掘り下げ。
11月10日　Ｔ33・35・41掘り下げ。
11月11日　Ｔ37～39掘り下げ。
11月12日　Ｔ24・25・30・31掘り下げ。
11月13日　Ｔ26・32掘り下げ。
11月14日　Ｔ１・27掘り下げ。
11月18日　Ｔ１・28・34掘り下げ。
11月19日　Ｔ29掘り下げ。Ｔ46・47埋戻し。
11月20日　Ｔ45・48・49埋戻し。
11月21日　Ｔ42・43・47埋戻し。Ｔ38遺構掘り下げ。
11月25日　Ｔ38遺構掘り下げ。Ｔ35埋戻し。
11月27日　Ｔ２・３・７・８掘り下げ。
12月１日　Ｔ６・12・14掘り下げ。Ｔ12から分銅形土製品出土。
12月２日　Ｔ15掘り下げ。Ｔ２遺構掘り下げ。
12月３日　Ｔ17掘り下げ。Ｔ30・35・39埋戻し。
12月５日　Ｔ21・50掘り下げ。
12月８日　Ｔ16・22・51掘り下げ。Ｔ50遺構掘り下げ。
12月９日　Ｔ９・19掘り下げ。
12月10日　Ｔ10・11・18・19掘り下げ。
12月11日　文化庁文化財調査官視察。
12月12日　Ｔ20・23掘り下げ。
12月15日　Ｔ18遺構掘り下げ。Ｔ21から縄紋晩期突帯文土器出土。
12月16日　Ｔ１・41・44埋戻し。Ｔ18遺構掘り下げ。
12月17日　Ｔ36埋戻し。
12月18日　Ｔ20・23埋戻し。
12月19日　Ｔ11・20・36・40埋戻し。
12月22日　Ｔ10遺構掘り下げ。Ｔ22・29埋戻し。
12月24日　Ｔ19・21埋戻し。
平成10年１月６日　Ｔ４・５・52掘り下げ。Ｔ５遺構検出。Ｔ17埋戻し。
１月７日　Ｔ５・52掘り下げ。Ｔ４・27埋戻し。
１月９日　Ｔ５・10遺構掘り下げ。Ｔ14・15・32埋戻し。
１月12日　文化財保護専門委員会の開催。Ｔ12埋戻し。
１月13日　Ｔ５・６遺構掘り下げ。Ｔ５・９・24・50埋戻し。
１月14日　Ｔ６埋戻し。
１月16日　Ｔ２・18・51・52埋戻し。Ｔ18ピット２埋土水洗選別。
１月19日　Ｔ３遺構掘り下げ。Ｔ８・37・38埋戻し。
１月20日　Ｔ３・７・13・16埋戻し。
１月26日　Ｔ25・26・33・34埋戻し。
１月27日　Ｔ10・28・34埋戻し。
１月28日　Ｔ31埋戻し。発掘器材の清掃・片付け。
１月29日　発掘器材の撤収。現場終了。

第２章　遺跡の位置と環境

清水谷遺跡ほかは岡山県の南西部に位置する小田郡矢掛町里山田地内に所在している。矢掛町は吉備高原の南縁にあたり、そのほとんどを山地が占め、町の南部を東西に流れる小田川流域に細い谷底平野がわずかにみられる。集落は主に小田川に沿ってつくられた自然堤防上や丘陵裾の緩斜面に営まれ、また、小田川に流れ込む多くの小河川によって作られた扇状地が可耕地として利用されている。

矢掛町内で最も古い人類の生活した痕跡は、清水谷遺跡の南で鴨方町との境に連なる山間部で採集された旧石器時代のナイフ形石器がある[1]。ここでは縄紋時代の石器も採集されているが、小田川に近い奥迫遺跡では早期の押型文土器が出土しており[2]、早くから活動の舞台であったことがうかがえる。後・晩期には奥迫遺跡で後期の土器が比較的まとまって見られるぐらいだが、晩期になると本遺跡や中池ノ内遺跡[3]で土器が出土するなど遺跡が次第に増加していくようである。

弥生時代に入ると、前期には今回の調査で本遺跡で確認した集落と、吉野遺跡で壺棺が出土している[4]程度でまだあまり知られていない。中期には本遺跡や大鳥居の散布地、奥迫遺跡といった低丘陵や小田川の自然堤防上といった地形のところに次第に生活区域を広げていき、後期になると遺跡は一層増加する。遺跡は丘陵部を中心に多く営まれ、後期前半の土器を多量に出土した白江遺跡[5]や特殊器台・特殊壺を出土した芋岡山墳墓群[6]などといった遺跡が見られ、小田川流域の拠点的集落へと発展していった様子がうかがえる。

古墳時代になると集落はまだ明らかではないが多くの古墳が築かれる。前半期には小田川南岸では箱式石棺をもつ芋岡山古墳群[7]、北岸には中山古墳群を中心として全長20～30m前後の前方後円墳が数基見られる。後半期には里山田の平地を臨む丘陵上に上井１・２号墳、畑中古墳群、橋本古墳群[8]といった横穴式石室を主体とした古墳群が築かれる。道々川の上流の奥まったところには一辺20数mを測る終末期の大型の方墳が築かれ、当地域の勢力の大きさと遙照山を越える南北交通の重要性を物語っている。

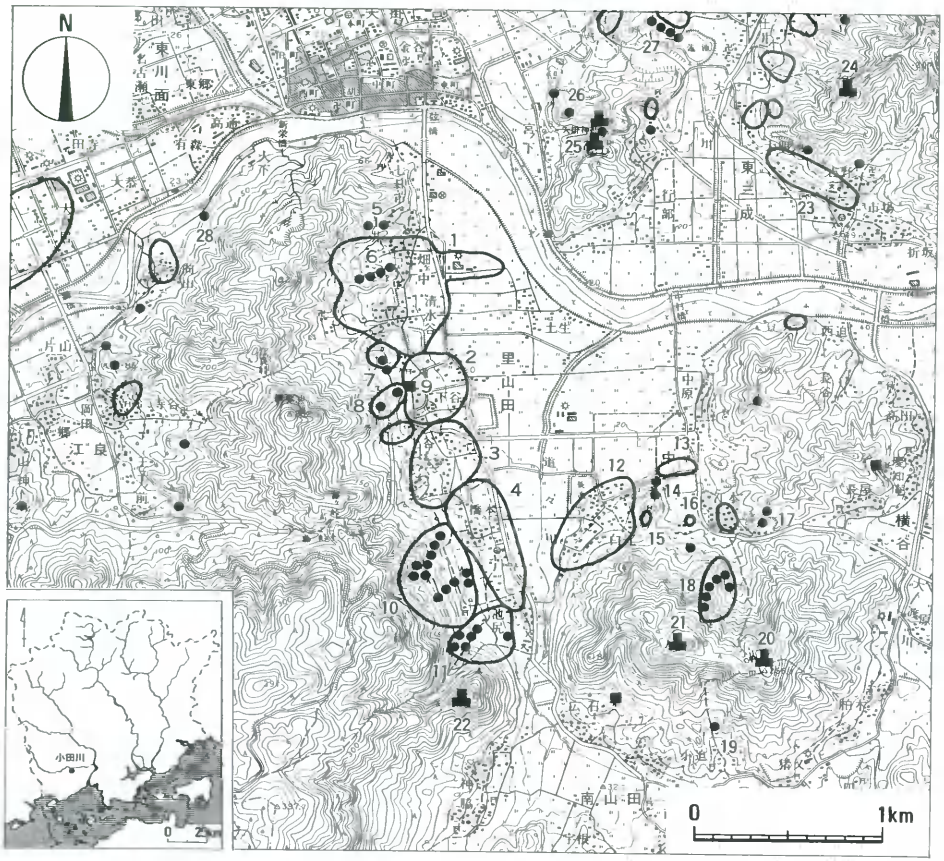
奈良時代には小田川にそって旧山陽道が通り、これ以降旧山陽道と小田川を用いた物資の交流が盛んとなっていく。古代の遺跡はこの沿線に多く見られる。町の東端で真備町との町境近くの丘陵には吉備真備の祖母の銅製骨蔵器が出土したといわれる下道氏墓所があり、町の西側には小田駅と推定されている毎戸遺跡、毎戸西方遺跡[9]などがある。また、白江遺跡では円面硯が出土しており、官衙の存在が推定されている[10]。

戦国期には備中国守護代の庄氏とその滅亡後の毛利氏との関係で、小田川を見下ろす丘陵頂部に備南最大の猿掛城をはじめとして要ガイ山城や茶臼山城など多くの山城が築かれる。そして、近世以降は宿場町として栄え、現在も本陣と脇本陣が残されている。

註

(1)　間壁忠彦ほか「第二章　郷土のあけぼの」『矢掛町史　本編』　矢掛町　1982
(2)　高畑知功「奥迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』60　岡山県教育委員会　1985
(3)　尾上元規「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108　岡山県教育委員会　1996
(4)　宇垣匡雅「吉野遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　岡山県教育委員会　1992

(5)　間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第１号　㈶倉敷考古館　1966
(6)　間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第３号　㈶倉敷考古館　1967
(7)　間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例」『倉敷考古館研究集報』第４号　㈶倉敷考古館　1968
(8)　平井　勝「岡山県矢掛町橋本荒神塚（橋本15号墳）の測量調査」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会　1997
(9)　下澤公明ほか「毎戸西方遺跡・毎戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5　岡山県教育委員会　1974
(10)　桑田俊明「白江遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』80　岡山県教育委員会　1992



1．清水谷遺跡ほか　2．里山田下谷遺跡　3．里山田上谷遺跡　4．橋本散布地　5．土井１・２号墳
6．畑中古墳群　7．四頃山古墳　8．三頃山古墳群　9．中世墓　10．橋本古墳群
11．池尻古墳群　12．白江遺跡　13．官衙推定地　14．芋岡山１・２号墳　15．芋岡山墳墓群
16．中池ノ内遺跡　17．江本裕安寺谷１・２号墳　18．安居寺谷古墳群　19．小迫大塚
20．山城跡　21．山城跡　22．山城跡　23．吉野遺跡　24．要ガイ山城跡
25．茶臼山城跡　26．蛸の頭古墳　27．中山４～７号墳　28．向山古墳　29．散布地

第１図　調査地周辺の地形と主要遺跡（1/30,000・1/300,000）

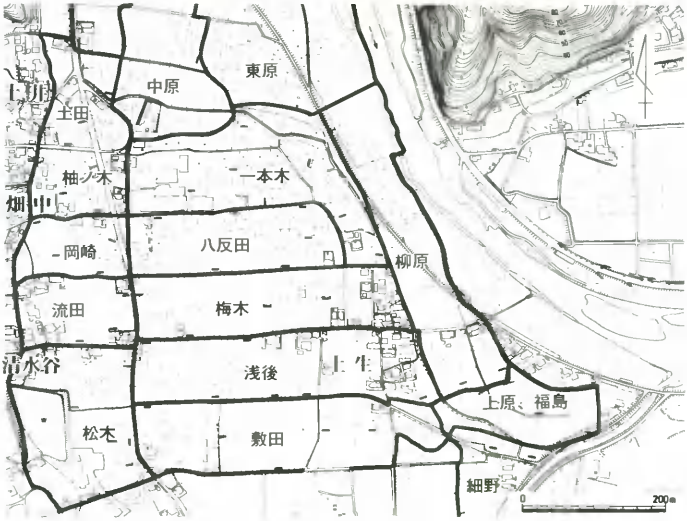
第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の設定と調査方法

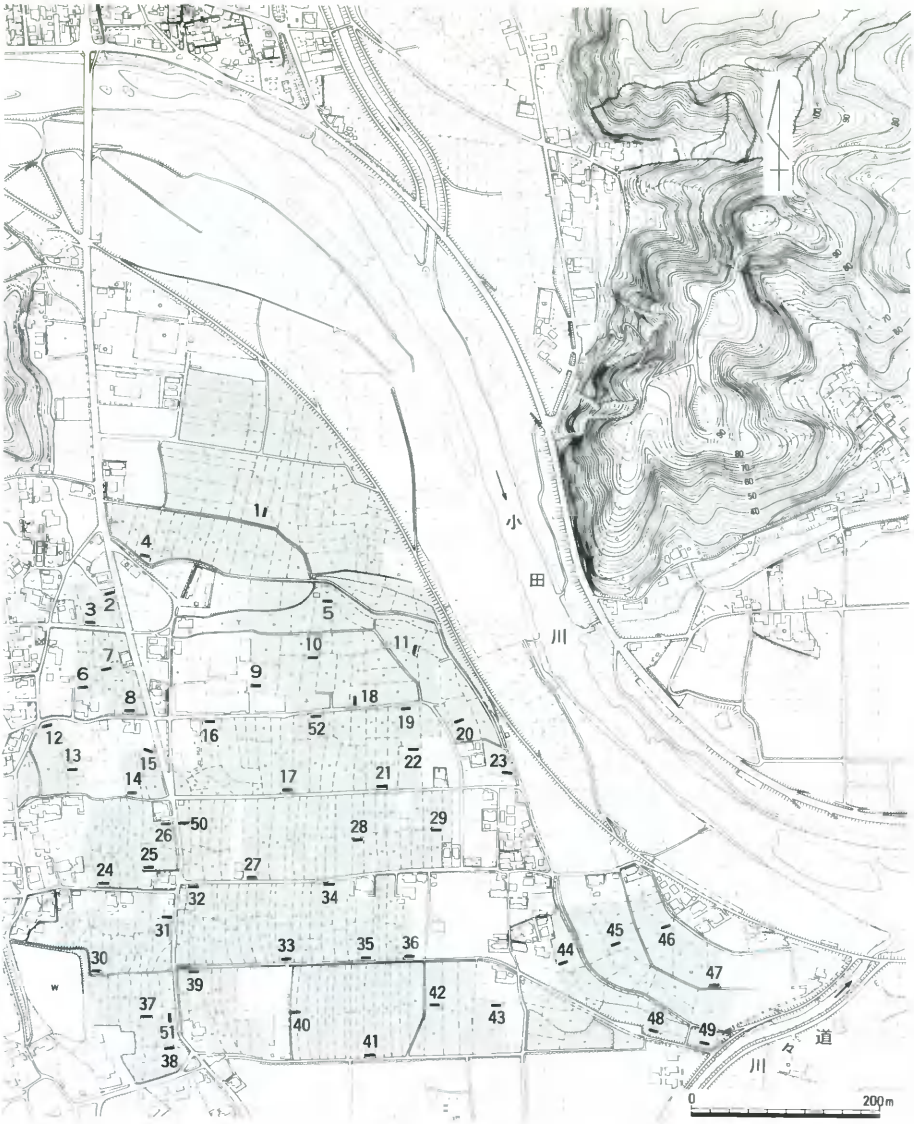
今回調査を行った地区は、南北に流れる道々川によってつくられた扇状地の北端と小田川の氾濫原にあたり、矢掛町里山田の北半に位置する。現在は西側の丘陵裾に「土井」・「畑中」・「清水谷」、東側の小田川南岸の自然堤防上に「土生」の集落がみられ、中央部分は一部工場などで宅地化されているものの、大半は水田として利用されている。調査の対象となるのはこの耕作地で、対象面積は南北730ｍ、東西730ｍのおよそ33haである。

昭和48年度の分布調査では、丘陵裾部の集落の中で遺物の散布が確認されていた。今回の調査に先立って改めて現地踏査をおこなった結果、周知されていた以外に小田川近くの土生集落近隣でも遺物が採集された。このため、確認調査にあたっては対象地区内に広くトレンチを設定し、遺跡の範囲と性格を確認することとした。トレンチは２×４ｍを50本と１×５ｍを２本の合計52本、410㎡を現地の地形を参考にして第３図のように設定した。調査は人力で掘削して行い、排土は耕作土とそれ以下を分別し、両者が交じらないように配慮した。また、調査終了後はランマにより数段階に分けて土を締めながら埋め戻しを行った。

遺跡名は「清水谷遺跡ほか」と集落名を冠して呼んでいるが、調査対象地内には第２図に示したように、「土田(つちだ)」・「柚ノ木(ゆのき)」・「岡崎(おかざき)」・「流田(ながれだ)」・「松木(まつき)」・「中原(なかはら)」・「東原(ひがしはら)」・「一本木(いっぽんぎ)」・「八反田(はったんだ)」・「梅木(うめのき)」・「浅後(あさご)」・「敷田(しきでん)」・「柳原(やなぎはら)」・「上原．福島(うえはら．ふくしま)」・「細野(ほその)」の15の小字が見られる。この呼称と境界が現在も使用されていることから、トレンチの位置や遺跡の範囲を示す際にはこれを用いて表記することとする。



第２図　調査地区周辺の小字地名（1/8,000）



第３図　トレンチ配置（1/6,000）－トーンは調査対象範囲を示す

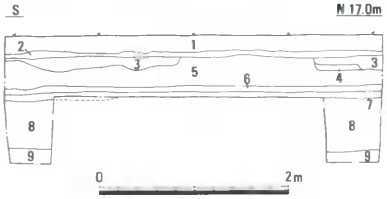
第２節　調査の概要

Ｔ１（第４図）　中原地区に南北軸で設定した。現耕作土以下は微砂もしくは微砂質の層がみられ、現地表面から約－125cmの海抜15.55ｍの高さで砂礫層となる。このことから本地点は小田川の氾濫原であったと推察される。遺物は第１～５層で近世陶磁器の破片がわずかに出土しているが、いずれも

土砂とともに上流からの流れ込みと判断される。

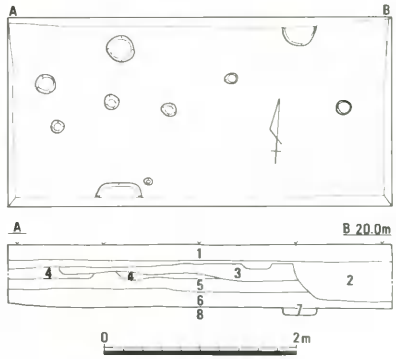
Ｔ２～Ｔ４（第５～７図、図版３・８）　上田地区に東西軸で設定した。Ｔ２は遺物包含層(第５・６層)を挟んで、現地表面から－62～66cmで海抜19.26～19.22mの第８層上面でピットを検出した。遺構埋土に灰褐色粗砂と暗灰色砂質土の二種類があることから二時期以上のものが併存していると考えられるが、共伴遺物がないため時期は明らかでない。遺物は第５・６層から弥生時代から中世のものが混在して出土している。１は弥生時代前期の甕で表面の摩滅が著しい。２・３は弥生土器の甕である。４・５は須恵器の甕の口縁部と胴部で、両者は別個体である。Ｓ１は尖基気味のサヌカイト製の鏃である。Ｔ３は現地表面から－35cmと－62cmで海抜20.96mと20.69mの２面の遺構面を確認した。各遺構面の時期は、上層は遺構出土遺物から古墳時代後期を中心とし、下層についてはそれ以前と判断されるが、詳細は明らかでない。遺物は地表面にも多く散布しており、各層に少量づつ含んでいる。６・７は弥生土器の甕、８は古墳時代前半の高杯である。９～12は古墳時代後期の須恵器で、９は第８層から出土した杯蓋、10は方形の二方透かしのある高杯、11・12は甕の肩部付近の破片である。13は鎌倉時代の土師器椀、14は中国製白磁碗である。Ｓ２・Ｓ３は上下にツブレがみられることから楔と思われる。Ｔ４では、現耕作土以下は粗砂と粘土が互層で堆積しており、Ｔ１と同様に小田川の氾濫原であったことが推察される。遺物は第４層の砂層中に幕末から明治ごろの陶磁器を多く含み、弥生土器もわずかにみられる。15は弥生土器の高杯、16は高高台の肥前系磁器碗、17は備前焼の擂鉢である。いずれも幕末ごろの洪水によって上流から流れてきたものと判断される。

Ｔ５（第８図、図版３）　一本木地区の北東端に東西軸で設定した。現地表面から－37cmと－66cmで海抜17.8mと17.51mの２面の遺構面を確認し、ピットを検出した。出土遺物は弥生土器の小片があるのみで遺構面の時期は明らかでないが、Ｔ

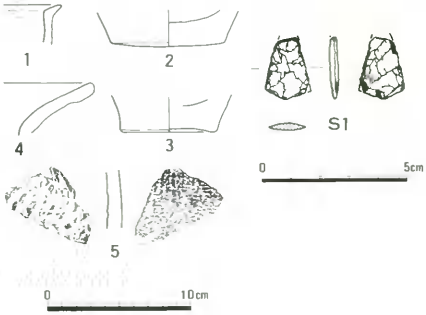


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色微砂
3．灰褐色微砂
4．褐灰色微砂
5．褐灰色砂質土
6．褐灰色粘性砂質土
7．褐灰色砂質土
8．褐灰色粘性砂質土
9．褐灰色砂礫

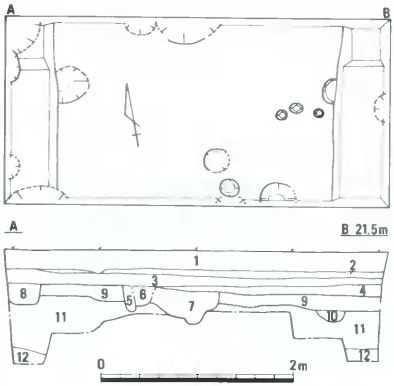
第４図　Ｔ１断面（1/60）



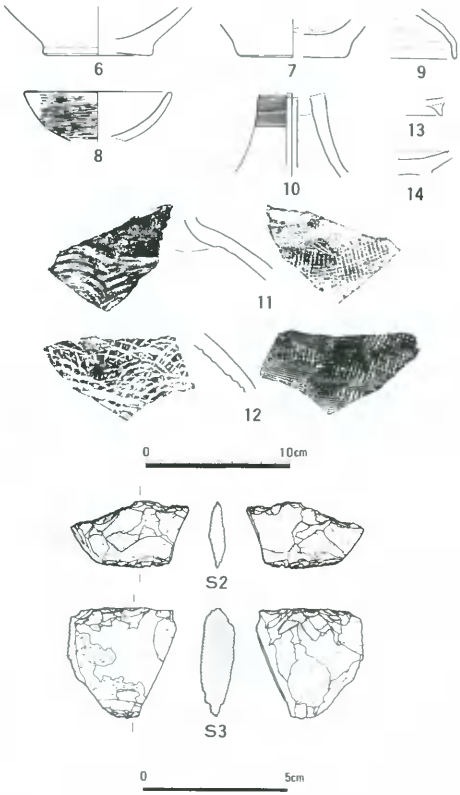
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土（整地土）
3．褐灰色粗砂
4．黒褐灰色土
5．暗褐灰色土（包含層）
6．黒褐色砂質土（包含層）
7．黒褐色土（ピット埋土）
8．にぶい橙褐色土



第５図　Ｔ２平・断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．黄灰色砂質土
3．にぶい黄褐色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．黒色土（ピット埋土）
6．黒褐色土（ピット埋土）
7．黒褐色土（ピット埋土）
8．黒褐色土（ピット埋土）
9．黒褐色砂質土（包含層）
10．灰色砂質土（ピット埋土）
11．にぶい黄灰色粗砂
12．黄色粘質土

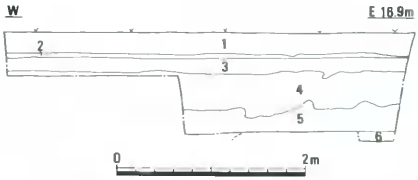


第６図　Ｔ３平・断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）

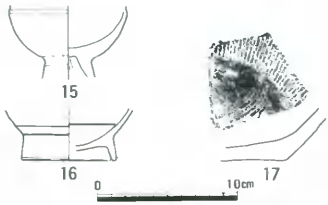
９・Ｔ10の状況から下面は弥生時代頃と推察される。

Ｔ６・Ｔ７（第９・10図、図版３・６）

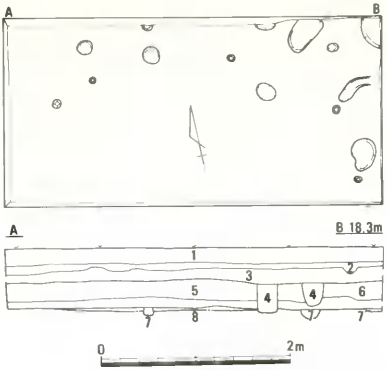
柚ノ木地区にＴ６を南北軸に、Ｔ７を東西軸に設定した。Ｔ６・７の遺構面は現耕作土のほぼ直下で確認され、丘陵上部からの流出土と考えられる粗砂上に築かれている。Ｔ６の遺構面は、現地表面から－24cmの海抜22.32mで確認された。第４層から出土した18の須恵器の杯蓋から遺構の時期は古代以降と判断される。19は須恵器の杯身である。Ｔ７の遺構面は，現地表面から－25cmの海抜21.55mで１面確認されたが、遺構に切り合い関係がみられることから二時期以上の遺構が併存していると考えられる。遺物は第１・２層から弥生時代から近世のものが混在して出土しているが、トレンチ中央で検出した溝の底面から古墳時代後期の須恵器が出土しており、検出した遺構はこれ以降のものと判断される。20は同じ溝の上層から出土した弥生時代前期前半の壺の破片で、21は須恵器の胴部である。



1．暗灰色土（現耕作土）
2．明橙色土（床土）
3．にぶい黄褐色砂質土
4．白色細砂（包含層）
5．灰色粘土
6．黄褐色粗砂

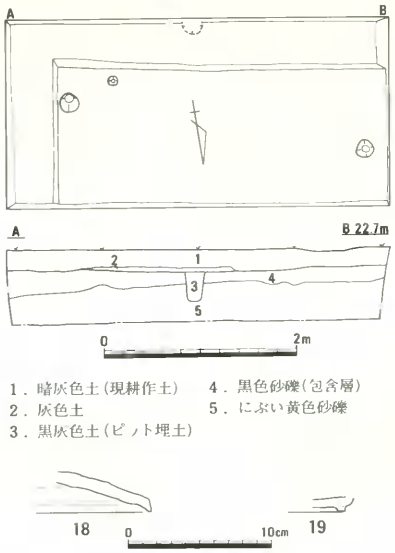


第７図　Ｔ４断面（1/60）と出土遺物（1/4）



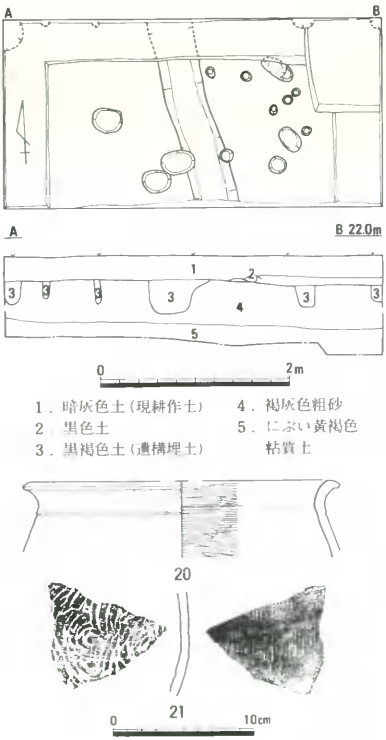
1．灰色土（現耕作土）
2．灰褐色土
3．にぶい黄褐色砂質土
4．暗褐灰色粘性砂質土（ピット埋土）
5．にぶい黄褐色粘性砂質土
6．暗褐色砂質土
7．暗褐灰色砂質土（ピット埋土）
8．にぶい黄灰色砂質土

第８図　Ｔ５平・断面（1/60）



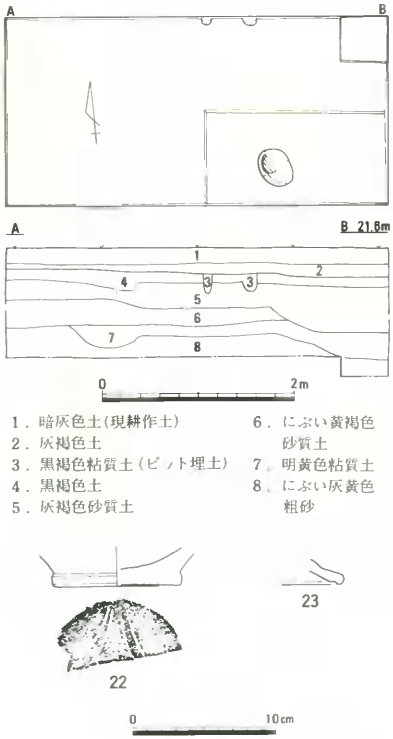
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土
3．黒灰色土（ピット埋土）
4．黒色砂礫（包含層）
5．にぶい黄色砂礫

第９図　Ｔ６平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．黒色土
3．黒褐色土（遺構埋土）
4．褐灰色粗砂
5．にぶい黄褐色粘質土

第10図　Ｔ７平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）



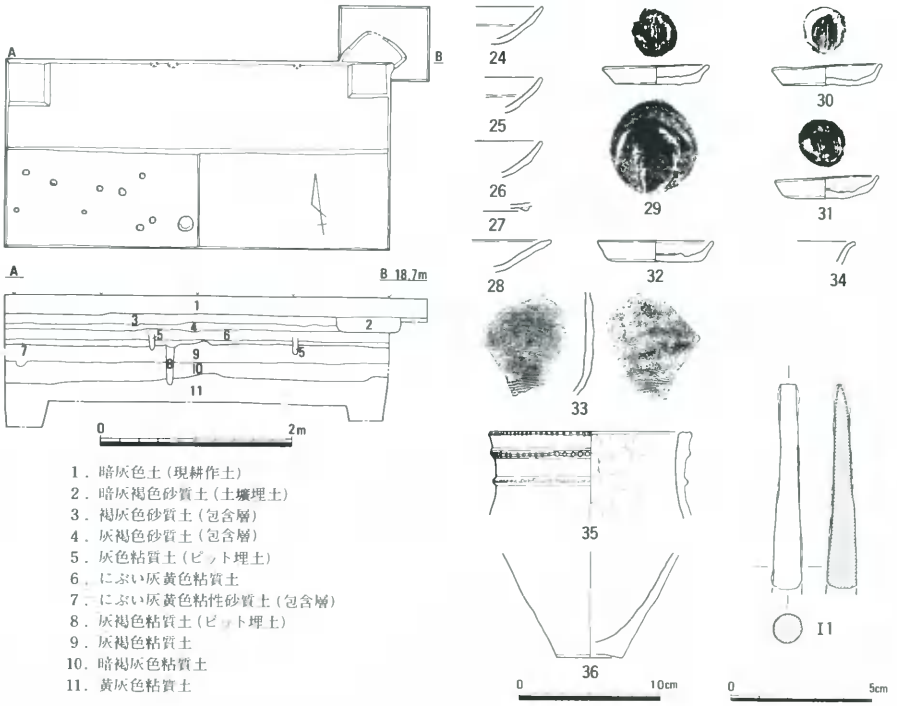
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰褐色土
3．黒褐色粘質土（ピット埋土）
4．黒褐色土
5．灰褐色砂質土
6．にぶい黄褐色砂質土
7．明黄色粘質土
8．にぶい灰黄色粗砂

第11図　Ｔ８平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）

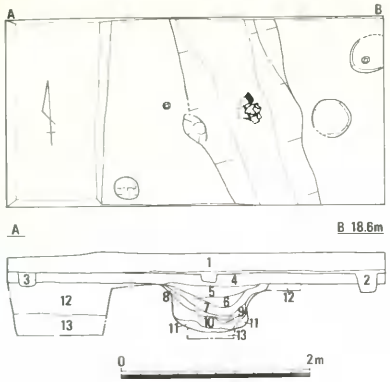
20の壺はあまり表面が摩滅していないことから、本地点に近いところに該期の遺構が存在する可能性が高い。

Ｔ８（第11図、図版７）　柚ノ木地区に東西軸で設定した。現地表面から－28cmの海抜21.18mで遺構面を確認した。遺構の時期は明らかでないが、弥生時代から古墳時代の遺物が第１・２層で出土していることから、古墳時代以降と判断される。また、土層断面で第６層上面の東側で落ち込みがみられる。平面では検出できなかったが流路になると推察される。この落ち込みの時期は、第６層以下の堆積が一本木地区で確認した微高地堆積土と近似していることから、弥生時代の可能性がある。22は弥生土器の甕の底部で外面に文様状の沈線がみられる。23は須恵器の高杯の脚である。

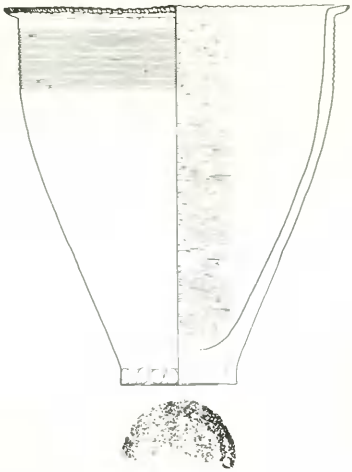
Ｔ９（第12図、図版３・７・８）　一本木地区に東西軸で設定した。遺構面は４面確認され、上から現地表面から－20cm、－35cm、－53cm、－92cmで海抜18.3m、18.15m、17.97m、17.58mである。トレンチの北東隅で検出した一辺約50cmの方形の土壙は、ほぼ同時期の整地層と考えられる第３層から掘り込まれている。土壙底面の中央と西、南の隅部分には完形の土師器小皿が並べられていた。遺構面の時期は第３層中に14世紀代の土器が含まれることから、最上面が室町時代と判断され、最下面はＴ10の状況から弥生時代前期ごろと推察される。24～33は土師器で24～26は椀の口縁部、27は椀の高台部、28は皿、29～32は小皿、33は鍋である。34は中国製の白磁碗、35・36は弥生土器で35は中期の壺、36は甕である。Ｉ１は中実の鉄製鑿である。29～31の小皿は土壙から出土したもので内面に仕上げナデ、外面にはヘラ切りの痕跡がみられる。

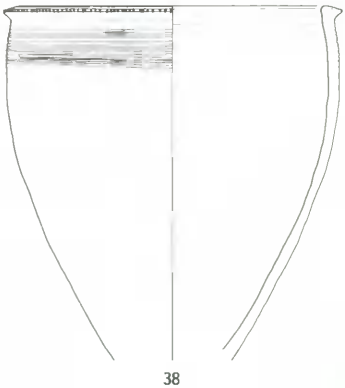


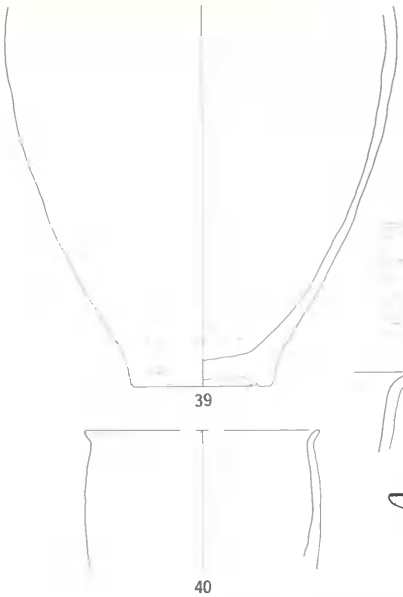
第12図　Ｔ９平・断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）

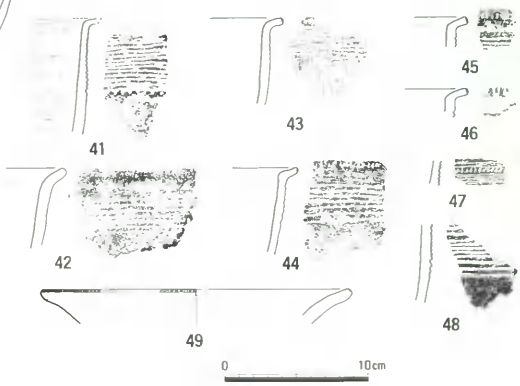


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色粘性砂質土
3．灰褐色土（ピット埋土）
4．灰褐色土（包含層）
5．灰褐色粘質土（溝埋土）
6．灰褐色粘質土（溝埋土）
7．暗灰色粘質土（溝埋土）
8．暗灰色粘質土（溝埋土）
9．灰褐色粘質土（溝埋土）
10．黒灰色粘質土（溝埋土）
11．灰黄色粘土ブロック
　　＋暗灰色粘土ブロック（溝埋土）
12．にぶい黄灰色粘質土
13．にぶい黄灰色微砂

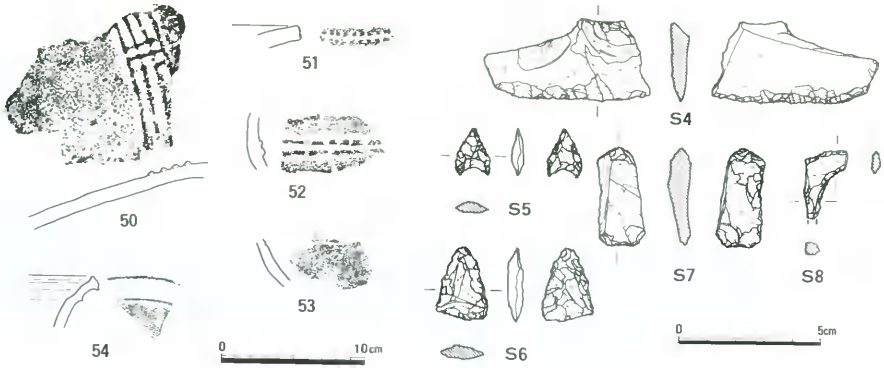








第13図　T10平・断面（1/60）と出土遺物①（1/4）

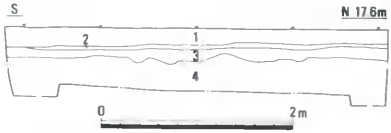


第14図　T10出土遺物 2 (1/2・1/4)

Ｔ10（第13・14図、図版１・２・６～８）　一本木地区の中央部分に東西軸で設定した。現地表面から－21cmと－32cmで、海抜18.18mと18.07mの２面の遺構面を確認した。第４層は古墳時代後期の遺物をわずかに含んでおり、上層の遺構はそれ以降と判断される。また、下層で検出した遺構は、埋土の状況からから二時期以上のものがあると推察される。下層で検出した溝は、幅115cm、深さ約50cmで埋土中に土器や石器を多く含んでいる。この溝は土層断面の観察から１回以上の掘り直しがみられ、37の甕は第８層下面で出土した。溝の南側ではやはり第８層近くで炭と焼土、サヌカイトの石屑がまとまって検出され、土器もこの部分で比較的まとまって出土した。37～49の甕と50～53の壺、Ｓ４～Ｓ８の石器は溝出土の遺物である。54は古墳時代後期の須恵器の壺である。37の底部外面には籾痕がみられる。弥生時代前期の甕の胴部の沈線はいずれも１本づつヘラ状工具で施文されている。壺50・51は同一個体の可能性が高いが、50は４条の突帯をを巡らせそれらに直交するように棒状の浮文を４本貼り付けている。Ｓ４はスクレイパー、Ｓ５・Ｓ６は鏃、Ｓ７は楔、Ｓ８は錐である。これらのほかに溝の南部の埋土を水洗選別してサヌカイトの石屑42.38ｇを抽出した。

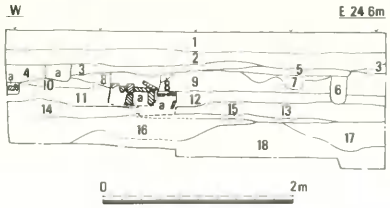
Ｔ11（第15図）　一本木地区の東端に南北軸で設定した。現地表面から約－30cmの海抜約17.2mでＴ10で弥生時代前期の遺構が築かれた基盤層と同様の第４層を確認した。しかし、弥生時代から近世の遺物が地表面にわずかに散布しているのみで、遺構は検出されなかった。第４層上層に堆積している第２・３層が砂か砂質土であり、Ｔ10の地点とは現地形でも約90cm低いことなどから小田川の氾濫によって遺構が削平されたものと推察される。

Ｔ12～Ｔ15（第16～19図、図版３・４・７・８）　岡崎地区の西側にＴ12・Ｔ13、Ｔ14・Ｔ15を東側にそれぞれ東西軸で設定した。Ｔ12は現地表面から－95cmの第15層までは近世以降の水田耕作土と造成土で、遺物もここまでで弥生時代から近世のものが混在してみられる。出土遺物の多くは近隣から持ち込んだと思われる造成土の中に含まれている。55は古墳時代後期の須恵器の杯身、56～59は古代の須恵器で、56は高台付の杯身、57・58は杯蓋、59は鉢で、60は古代の土師器椀である。61～64は近世の備前焼で、61は４つの

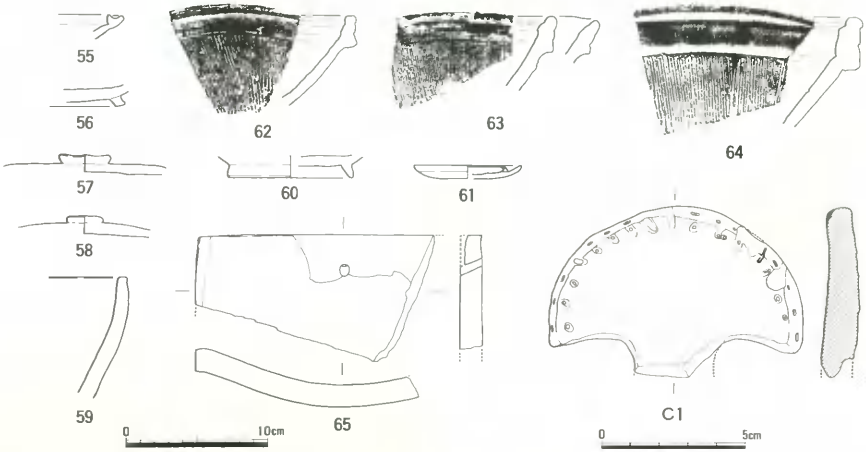


1．暗灰色土（現耕作土）　3．灰色細砂
2．暗灰色砂質土　4．にぶい黄色粘質土

第15図　T11断面 (1/60)

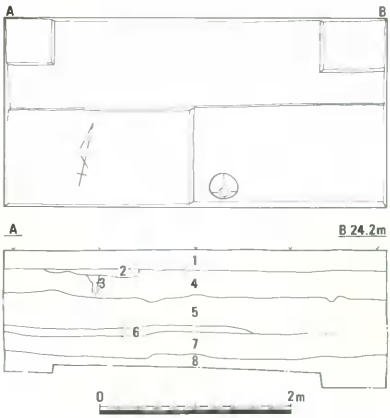


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土（造成土）
3．青灰色砂質土
4．暗灰色土
5．褐灰色砂質土（包含層）
6．暗褐灰色土（ピット埋土）
7．灰色粗砂
8．淡青灰色細砂
9．褐灰色土（包含層）
10．暗灰色砂質土
11．暗灰色土
12．黒灰色土（包含層）
13．淡青灰色土
14．灰褐色砂質土
15．明橙色土
16．淡オリーブ灰色微砂
17．褐灰色細砂
18．褐灰色粗砂
a．暗渠



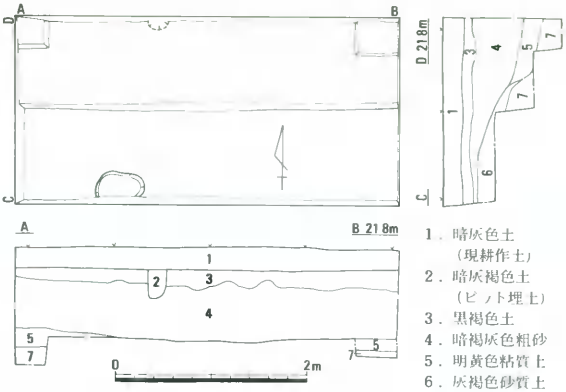
第16図　T12断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）

軸受けをもつ灯明皿、62～64は擂鉢で63は口の部分である。65は近世の燻し平瓦、Ｃ１は表面の摩滅が顕著な分銅形土製品である。Ｔ13・Ｔ14は現耕作土の直下で遺構面を確認した。Ｔ13はピット内から古墳時代後期の須恵器の甕片が出土し、第１層までに同時期の遺物しかみられないことから該期の遺構と判断される。また、現地表面から約－110cmの海抜22.9mで明黄灰色粘質土の安定した面がみられ、さらに下層に遺構が存在する可能性もある。Ｔ14では第１層中に古墳時代から近代の陶磁器類が出土したのみで遺構の時期は明らかでないが、Ｔ13の状況と近似することからほぼ同時期と推察される。また、ここでは南側から北へ下がる斜面堆積の状況がみられ、本地点より南側の流田地区の北部が尾根状の高まりであることが想定される。Ｔ15は現地表面から－50cmの面でマンガン分の固結面があり、それ以下については調



1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色粗砂
3．灰褐色土（ピット埋土）
4．黒褐色土
5．暗褐灰色粗砂
6．にぶい黄灰色粘性砂質土
7．暗褐灰色砂質土
8．明黄灰色粘質土

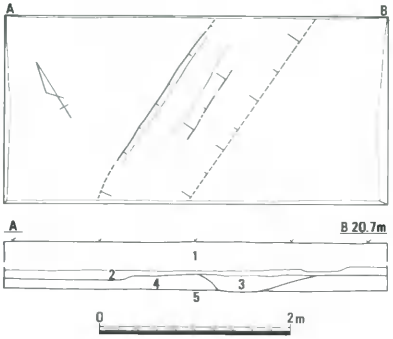
第17図　T13平・断面（1/60）

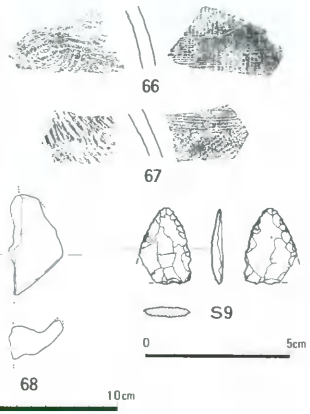


第18図　T14平・断面（1/60）

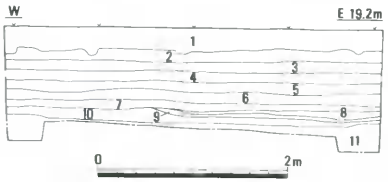
査できなかった。遺構面は現地表面から－34cmの海抜20.25mで１面確認され、粗砂を埋土にもつ幅約85cmの流路を検出した。遺構の時期は、第５層直上で弥生時代から古代・中世の遺物がみられることからそれ以降と判断される。66・67は須恵器の甕の胴部、68は古代の土師器の甑の把手である。Ｓ９は石鏃である。

Ｔ16・Ｔ17（第20・21図、図版４）　八反田地区に東西軸で設定した。Ｔ16は現地表面から－86cmの海抜18.25ｍで、Ｔ17では－56cmの海抜17.96ｍで黄色粘質土の比較的安定した面を確認したが、明確な遺構は検出されな

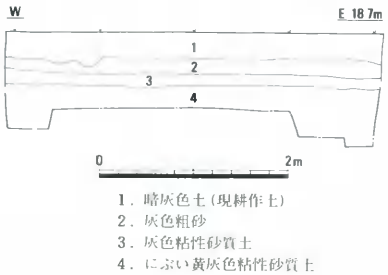




第19図　T15平・断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）



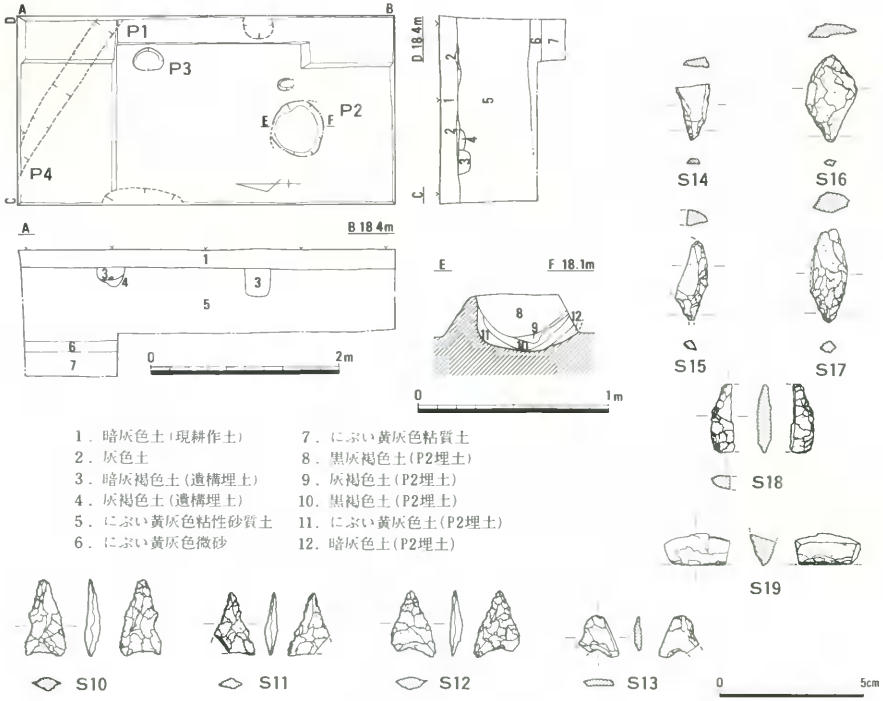
第20図　T16断面（1/60）



第21図　T17断面（1/60）

かった。この層はＴ16では厚さ16cmなのに対してＴ17では60cm以上と厚い。また、この層の上には粗砂か砂質土が水平に堆積しており、現在見られる畦畔がＴ16からＴ17にかけて大きく孤を描いていることから、洪水によって上面が削平されていると推察される。出土遺物はＴ16では第３・５・７層で土師器の小片がみられるものの時期のわかるものはない。Ｔ17では古墳時代から中世の土器が第１・２層で出土している。いずれも、後世の流れ込みと判断される。

Ｔ18（第22図、図版２・８）　一本木地区に南北軸で設定した。遺構面は現地表面から－18cmの海抜18.05mで１面確認された。遺構の埋土に第３・４層土の二種類が見られ、両者に切り合い関係がみられることから２時期以上の遺構が存在するものと推察される。トレンチ中央南で検出したＰ２は埋土に炭と焼土を多く含んでおり、Ｐ３などの柱穴が存在することから竪穴住居の中央穴と考えられる。また、東壁のＰ１と北壁のＰ４は底面の高さと断面形が近似することから溝になると推察され、Ｐ２やＰ３とともに竪穴住居に関連する遺構の可能性が高い。出土遺物は第１層中に弥生時代から中世のものが散見される。図示したＳ10の石鏃はＰ１から、Ｓ11～Ｓ19はＰ２から出土したものである。Ｐ２とＰ３の埋土中には調査中に石器のほかに石屑や剥片がみられたため埋土をすべて水洗選別した。その結果、Ｐ２からはＳ11～Ｓ13の鏃とＳ14～Ｓ17の錐、Ｓ18・Ｓ19の楔のほかにサヌカイトの石屑と剥片96.35ｇ、メノウの石屑37点，1.15ｇが出土した。Ｐ３からはサヌカイトの石屑2.64ｇとチャートの石屑１点，0.14ｇ、メノウの石屑２点が出土した。多量の剥片・石屑が出土したことから石器製作が行われていたことが想像されるが、メノウ片の出土から玉作りも行われていた可能性もあ



第22図　Ｔ18平・断面（1/30・1/60）と出土遺物（1/2）

る。これらの遺構の時期は、ピット内出土の土器が小片のため明らかでない。しかし、本トレンチより北西に位置するＴ10で検出した弥生時代前期後半の溝からも同様にサヌカイトの石屑が出土しており、これと同時期の可能性が高い。

Ｔ19（第23図）　八反田地区の北西に東西軸で設定した。遺構面は現地表面から－28cmの海抜17.86mと－62cmの17.52mの２面を確認した。遺構の時期は、トレンチ内で弥生時代から中世の遺物がみられるが層位的に明らかでなく、遺構埋土や堆積層の状況から上層の遺構は中世以前、下層のものは弥生時代ごろのものと推察される。本地点はＴ10やＴ18で微高地を確認した一本木地区のすぐ南側に位置する。微高地堆積土に近似する第６層上面でピットが確認されたことから、微高地がさらに南へ広がると考えられる。69は弥生時代後期の壺だが、表面がやや摩滅しており流れ込みの可能性が高い。

Ｔ20（第24図、図版４）　一本木地区の東端に東西軸で設定した。遺構面は確認されず、砂と砂質土が薄く数層に堆積し、現地表面から－120cmの海抜15.2mでは砂礫層がみられる。これらのことから本地点は氾濫原で微高地はここより西側までと判断される。

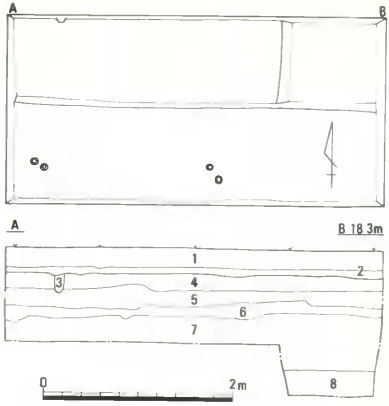
Ｔ21・Ｔ22（第25・26図、図版６）　八反田地区の東部に東西軸で設定した。Ｔ21は遺構面は確認されなかったが、第５層上面で縄紋時代晩期の突帯文土器(70～72)が出土した。この土器はまったく摩滅しておらず、この層の上面が該期の生活面である可能性もある。第７層は微砂層で砂中に長さ１m以上、幹径30cm以上の流木を含んでいる。73は弥生土器の底部で第４層から出土した。Ｔ22も遺構面は確認されなかったが、現地表面から約－116cmの海抜約16.9mの第８層まで弥生時代前期の土器が出土する。微高地堆積層や水田層と思われる層は確認されなかったが、第９～11層には炭が非常に多く含まれている。第12層には木片や植物質を多く見られ、湿地状を呈していたと考えられる。

Ｔ23（第27図）　一本木地区の南東に東西軸で設定した。遺構は確認されなかったが、現地表面から－53cmの海抜15.76mで砂礫層となり、それ以上も小礫を含んだ砂質土層が堆積していることから小田川の氾濫原であったと考えられる。

Ｔ24～26（第28～30図、図版４・７・８）　流田地区にそれぞれ東西軸で設定した。Ｔ24では第５層が造成土で、第６～９層は粘土と砂が互層に堆積していることから、溝の埋土の可能性がある。これらの層は第９層上面で近世頃の木組みの暗渠状の構造物がみられることから、第７層までは近世以降の堆積層と判断される。第10層はグライ化が顕著だが、非常にしまりがよいため、この面に遺構が存在する可能性がある。Ｔ25は第７層上面で比較的固く締まったマンガン分の固結面がみられるが、遺構は確認されなかった。しかし、同様の状況でＴ26では遺構が築かれていることから、この周辺に遺構が存在する可能性は高い。また、第６層は弥生時代から古墳時代の遺物包含層で、Ｔ26の第７層に対応するものと判断される。Ｔ26では現地表面から－90cmの海抜約20.2mで遺構面１面を検出した。遺構の時期は第７層包含層の出土遺物から古墳時代後期以降と判断される。75は弥生土器の甕、76～78は古墳時代後期ごろの須恵器で76は高杯、77は壺、78は甕である。79は中世の土師器の台付皿、80は亀山焼の擂鉢である。Ｓ20・Ｓ21は鏃と楔である。

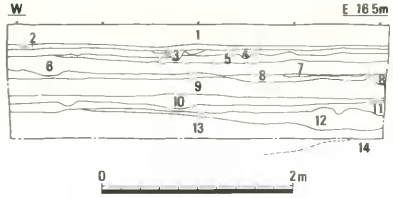
Ｔ27～Ｔ29（第31～33図、図版８）　梅木地区にそれぞれ東西軸で設定した。Ｔ27・Ｔ28ともに遺構面は確認されなかったが、Ｔ27では現地表面から約－90cmの海抜18.0mで黒色粘質土を確認した。この面より上層には砂や砂質土の堆積がみられることから数回にわたって洪水に見舞われているものと判断される。Ｔ28では現地表面から－105cmの海抜16.95mで比較的安定した面を確認したが、この上層は粘性の強い土が堆積し、Ｔ27とはやや状況が異なっている。Ｔ29は現耕作土以下は基本的に黄褐

色系の砂質土が厚く堆積しており、現地表下－150cmまで調査したがほとんど変化はみられない。本地点が土生集落のすぐ西に位置することから、小田川の自然堤防の堆積層と考えられ、明確な遺構面は確認されなかったが本地点よりさらに東側には遺構が存在する可能性が高い。



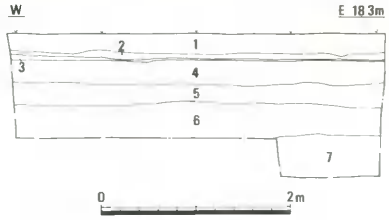
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰白色粘質土
3．黒灰色粘質土（ピット埋土）
4．暗褐灰色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．灰黄色粘質土
7．灰黄色砂質土
8．灰色砂礫

第23図　T19平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）

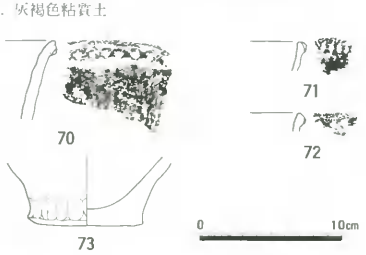


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土
3．灰色粗砂
4．灰色微砂
5．灰褐色土
6．灰褐色土
7．褐灰色土
8．褐灰色土
9．褐灰色粘性砂質土
10．褐灰色粘性砂質土
11．暗灰褐色粘性砂質土
12．褐灰色微砂
13．褐灰色粘質土
14．褐灰色砂礫

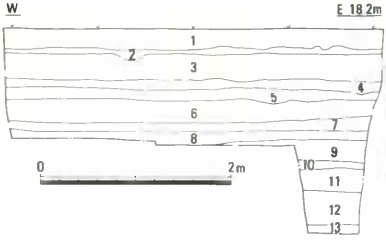
第24図　T20断面（1/60）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．にぶい橙色砂質土
3．黄灰色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．黄灰色粘性砂質土
6．黄灰色微砂
7　青灰色微砂



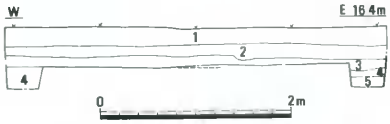
第25図　T21断面（1/60）と出土遺物（1/4）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．明黄白色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．黒灰色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．灰色粘質土
7．灰色微砂
8．灰色砂質土
9．灰色粘土
10．灰色粘土
11．灰色粘土
12．暗灰色粘土
13．青灰色細砂

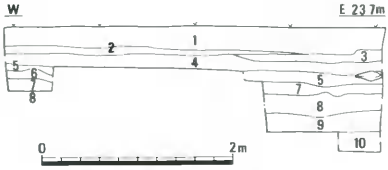
第26図　T22断面（1/60）と出土遺物（1/4）

Ｔ30・Ｔ31（第34・35図、図版４・８）　松木地区北部に東西軸で設定した。Ｔ30は松木池の堤防のすぐ東裾にあたり、現地表面から－35cmの海抜23.47ｍでマンガンの固結面を確認した。この面には弥生時代から中世の土器が固結していたが、遺構は確認されなかった。Ｓ23は全面を研磨して加工した不明石製品である。厚さ７mmと薄く、側辺が緩く孤を描き、底面は平らでなく安定していない。Ｔ31は現地表面から－100cmの海抜20.7ｍで黄色粘質土の安定した遺構面を確認した。遺構はこの面をえぐって粗砂を埋土にもつ幅２ｍ以上の流路と、それが埋没した後に築かれたピットがある。これらの遺構の時期は出土遺物がないため明らかでないが、第１～６層までで古代～中世の遺物がわずかに出土していることから、それ以前と推察される。



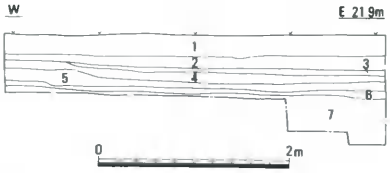
１．暗灰色土（現耕作土）
２．灰色砂質土
３．褐灰色砂質土
４．灰色細砂
５．褐灰色砂礫

第27図　Ｔ23断面（1/60）



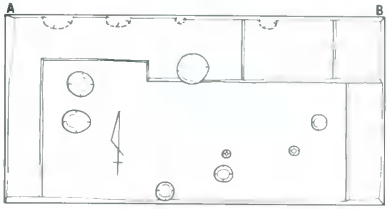
１．暗灰色土（現耕作土）
２．にぶい橙色土（床土）
３．褐灰色砂質土
４．暗灰褐色細砂
５．黒灰色砂質土（造成土）
６．暗灰色粘性砂質土
７．褐灰色粗砂
８．暗灰色粘土
９．暗灰色砂
10．オリーブ灰色砂質土

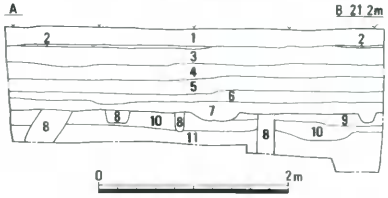
第28図　Ｔ24断面（1/60）



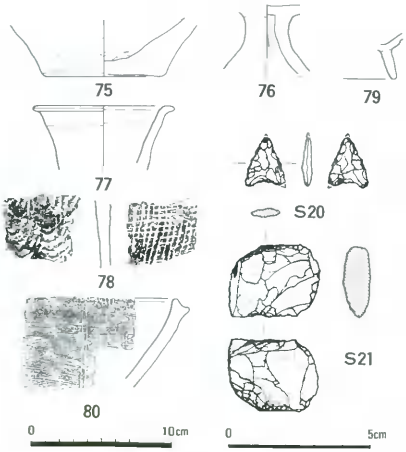
１．暗灰色土（現耕作土）
２．褐灰色砂質土
３．灰褐色砂質土
４．灰褐色砂質土
５．褐灰色砂質土
６．灰褐色粗砂（包含層）
７．にぶい黄褐色粗砂

第29図　Ｔ25断面（1/60）

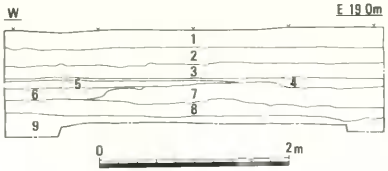




１．暗灰色土（現耕作土）
２．淡オリーブ灰色土
３．灰褐色土
４．灰色土
５．暗灰褐色土（包含層）
６．暗灰褐色粗砂（包含層）
７．黒褐色土（包含層）
８．黒褐色土（ピット埋土）
９．にぶい橙色土
10．にぶい黄褐色土
11．灰褐色粗砂

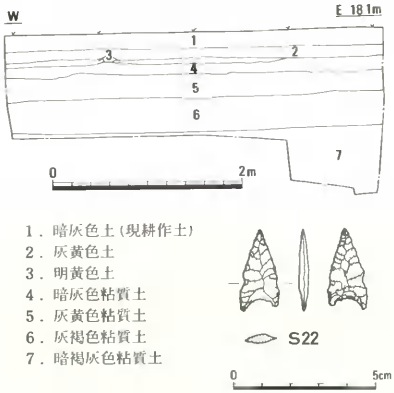


第30図　Ｔ26平・断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）



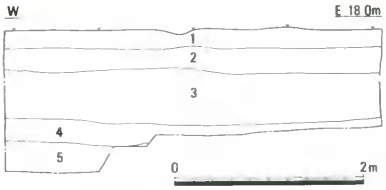
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色砂質土
3．灰色土
4．にぶい灰黄色砂質土
5．暗灰色粗砂
6．灰色細砂
7．黄褐色粘性砂質土
8．灰色粗砂
9．黒色粘質土

第31図　T27断面（1/60）



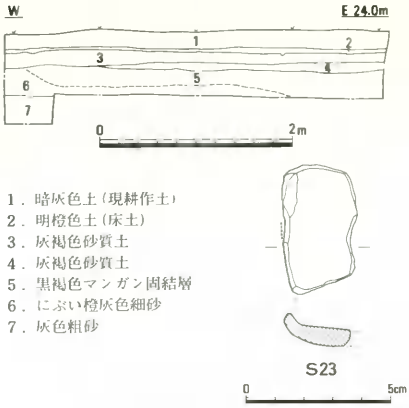
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰黄色土
3．明黄色土
4．暗灰色粘質土
5．灰黄色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．暗褐灰色粘質土

第32図　T28断面（1/60）と出土遺物（1/2）



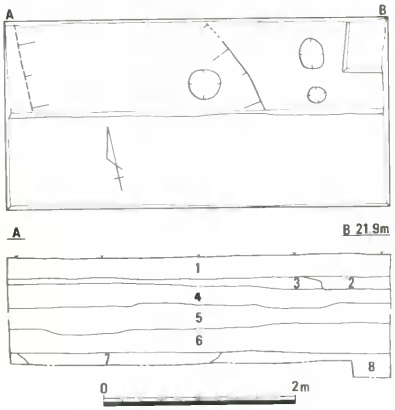
1．暗灰色土（現耕作土）
2．淡黄褐色粘性砂質土
3．にぶい黄褐色微砂
4．灰褐色粘性砂質土
5．褐灰色粘質土

第33図　T29断面（1/60）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．明橙色土（床土）
3．灰褐色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．黒褐色マンガン固結層
6．にぶい橙灰色細砂
7．灰色粗砂

第34図　T30断面（1/60）と出土遺物（1/2）



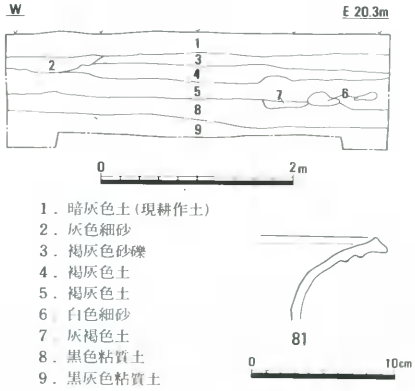
1．暗灰色土（現耕作土）
2．暗灰色土（攪乱層）
3．橙褐色土
4．褐灰色土
5．灰褐色土
6．灰褐色粗砂
7．灰色粗砂（流路埋土）
8．黄色粘質土

第35図　T31平・断面（1/60）

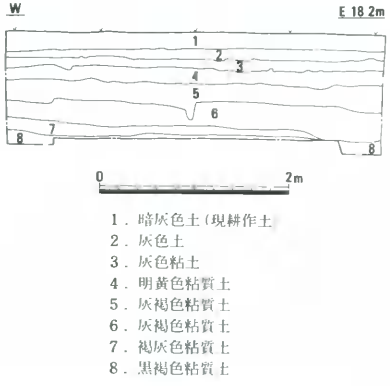
T32～T36（第36～40図、図版４）　浅後地区にそれぞれ東西軸で設定した。T32はT31とは県道を挟んで近接している。しかし、T31で確認した遺構面を形成している黄色粘質土は確認されず、現地表面から－70cmの海抜19.45mで黒色土がみられ、この層より上位には砂や第６層のように砂がレンズ状に堆積しており、本来は黒色土の上にあった黄色粘質土が洪水で削平されたものと判断される。遺物は81の弥生時代中期の壺が１点出土したが、流れ込みと考えられる。T33は現地表面から－58cmの海抜約18mで比較的しっかりした面を確認したが、遺構はみられなかった。しかし、第５～７層の

堆積する南西にむかって下がる浅い窪みがみられ、これが流路になる可能性がある。遺物は第４層以上で古墳時代から近世のものが出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。Ｔ34はこの北にあるＴ28の状況に近似して締まりのよい粘質土の堆積がみられるのみで、遺構面は確認されなかった。遺物も耕作土近くの層で中世の土器がわずかに出土したのみである。Ｔ35は現地表面から－50cmの海抜約17.3m以下は砂で埋没した流路が幾重にもみられ、何度も洪水に見舞われる不安定な土地であったことがうかがえる。また、－80cmの海抜17.0mでＴ32などでみられた黒色土がある。遺物は第３層以上で古墳時代から中世のものがわずかに出土しているが、周辺のトレンチ同様に流れ込みと考えられる。Ｔ36は現地表から－45cmの海抜17.32mでＴ35の第６層に対比される層が確認されたが、黒色土は確認されなかった。灰褐色粗砂層はＴ35では約30cmの厚さだったがＴ36では50cm以上の厚さがあり、東側に地形が下がっていることがわかる。

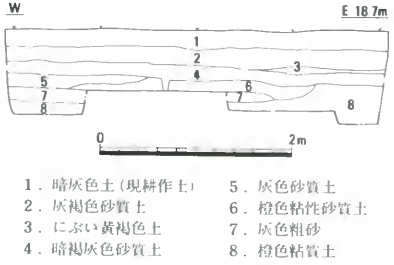
Ｔ37（第41図、図版８）　松木地区の南部で東西軸に設定した。土層の堆積状況から地形は北東に傾斜しており、本地点が斜面部にあたっていることがわかる。遺構面は確認されなかったが、現地表面から約－28cmと－40cmで遺物の包含層を確認した。上層の第３層中には弥生時代から中世の遺物がみられ、下層の第５層では弥生時代から古墳時代のものが比較的多く含まれるが、いずれも小片で表面の摩滅が顕著である。これらの遺物から、現地形でトレンチの南側は数十cm高く、現在は畑と宅地として利用されているが、本来はこの高い部分に遺構が存在していたと推察される。図示した遺物は、



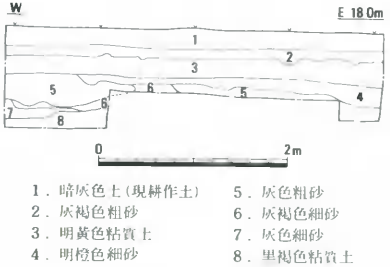
第36図　Ｔ32断面（1/60）と出土遺物（1/4）



第38図　Ｔ34断面（1/60）



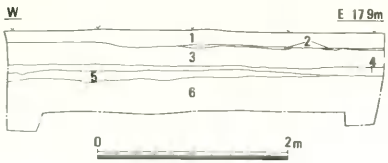
第37図　Ｔ33断面（1/60）



第39図　Ｔ35断面（1/60）

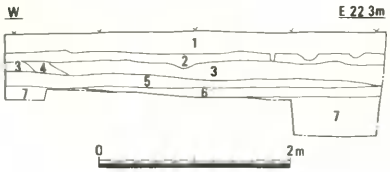
82～84が弥生時代後期の甕、85が中世の土師器椀である。Ｃ２は円板形土製品で、弥生土器の甕の胴部片を転用して周辺を打ち欠いて作っている。

Ｔ38（第42図、図版２）　松木地区の南部で、尾根線に対して平行する東西軸で設定した。現地表面から－75cmの海抜21.76ｍでマンガン分が固結した遺構面を確認した。この面の直上に堆積した第７層中には弥生時代から古墳時代の土器の小片がみられる。また、遺構面の基盤層となる第15層は砂質土で下層ほどしまりが悪くなる。遺構面には大型の柱穴と土壙、竪穴住居がみられる。竪穴住居はトレンチ東端で北西部部がわずかに検出されたのみだが、検出状況から平面形は方形を呈すると考えられる。埋土は15cmのみ残存しており、床面の高さは海抜21.66ｍで、壁際には幅約15cmの壁体溝が巡る。土壙はトレンチの南壁部分で検出された。一部分のみの検出なので全体の規模は不明だが、楕円形を呈すると推察される。埋土は暗褐灰色土の単層で、検出面から約40cm堆積している。底面は比較的水平で、海抜高は約21.4ｍである。柱穴は６基検出された。これらの柱穴の平面形は楕円形か円形を呈し、掘り方の規模は大きいもので76×50cm、小さいもので50×45cmとまちまちである。深さは確認できたもので、Ｐ５とＰ６が40～45cmとやや浅く、そのほかは50～60cmである。また、柱の規模は径約25cmほどで、これを掘り方のほぼ中央に垂直に立てて単層で埋めている。これらの柱穴は、柱の通りが一直線にはならず、柱の深さや規模も規格性に乏しい。しかし、柱間距離が約１ｍでほぼ等間隔であり、埋土の色調や柱の構築方法を考え合わせると同時に築かれた可能性が高く、これらの柱穴を用いて掘立柱建物になると判断される。

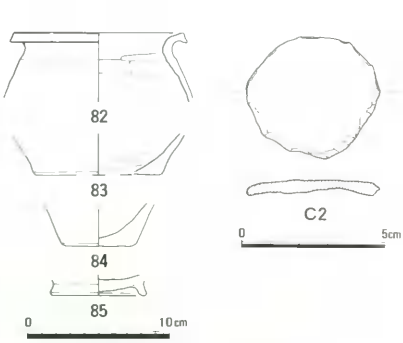


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土
3．褐灰色粘質土（旧耕作土）
4．明黄色粘質土
5．にぶい黄褐色粘質土
6．褐灰色砂質土

第40図　Ｔ36断面（1/60）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．にぶい黄褐色土
3．灰褐色粗砂（包含層）
4．灰褐色粘性砂質土
5．黒褐色粗砂（包含層）
6．灰色粗砂
7．褐灰色砂質土

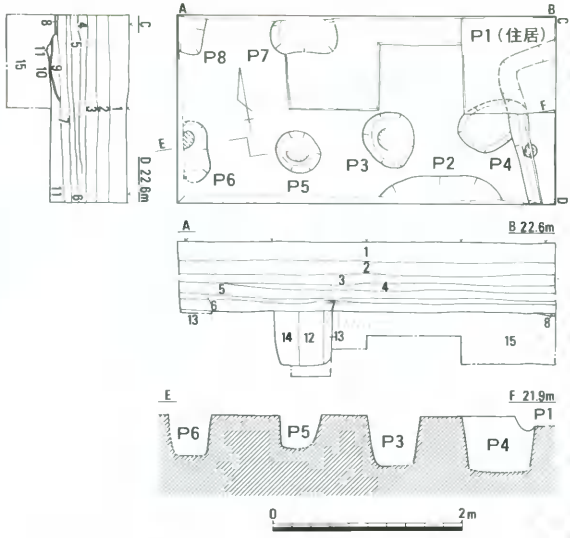


第41図　Ｔ37断面（1/60）と出土遺物（1/2・1/4）

以上、検出された遺構の時期は、柱穴から古墳時代後期の須恵器杯片が出土しており、上層の包含層の遺物を参考にすると、すべての遺構がこの時期ごろと推察される。また、柱穴Ｐ４と住居の切り合い関係から住居は建物以降につくられたことがわかる。

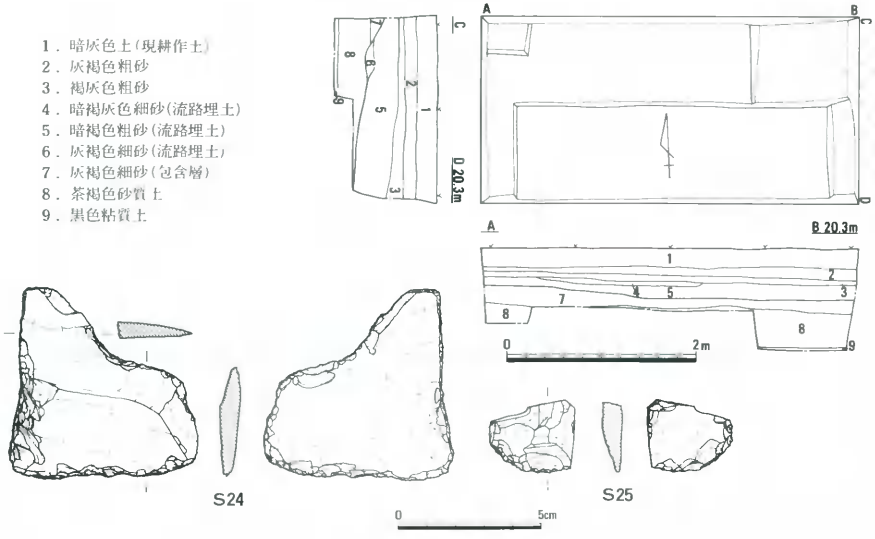
Ｔ39（第43図、図版８）　敷田地区の北西部に東西軸で設定した。現地表面から－40cmの海抜19.74ｍで暗褐色の粗砂で埋没した流路を検出した。この流路の肩はトレンチ内では確認できなかったが、埋土の第５・６層が南東に向かって傾斜していくことから流路本体はトレンチの南にあると考えられ

1．暗灰色土（現耕作土）
2．にぶい橙褐色砂質土
3．黄灰色粘性砂質土
4．にぶい黄灰色砂質土
5．灰褐色砂質土
6．褐灰色砂質土
7．灰色粗砂（包含層）
8．黒褐色砂質土
9．暗褐灰色砂質土（住居埋土）
10．炭層（住居埋土）
11．褐灰色砂質土（住居埋土）
12．にぶい黄褐色砂質土（柱穴埋土）
13．褐灰色砂質土（柱穴埋土）
14．褐灰色砂質土（柱穴埋土）
15．褐灰色粗砂



第42図　T38平・断面（1/60）

1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰褐色粗砂
3．褐灰色粗砂
4．暗褐灰色細砂（流路埋土）
5．暗褐色粗砂（流路埋土）
6．灰褐色細砂（流路埋土）
7．灰褐色細砂（包含層）
8．茶褐色砂質土
9．黒色粘質土



第43図　T39平・断面（1/60）と出土遺物（1/2）

る。この流路の時期は、その下層の第７層中に弥生土器を包含していることからそれ以降と判断される。また、現地表面から－104cmの海抜19.1mでT32やT35の最下層で確認した黒色土がみられる。図示した石器は調査中に出土したため出土層位は明確でないが、石器の入っていた土質等から流路に帰属すると考えられる。S24・S25はスクレイパーで、S24は縦長の剥片の周辺を粗く加工して刃部とつまみを作り出している。打点部分には自然面を残している。

Ｔ40～Ｔ43（第44～47図、図版４）　敷田地区に東西軸で設定した。Ｔ40は現地表面から－44cmの海抜17.88mで遺構面を検出した。遺構は暗灰色土で埋まったピットで、いずれも３～４cmと浅く残存状況は悪い。この遺構の築かれた第４層以下には第５層の粗砂層が約40cmの厚さで堆積し、そのさらに下層の現地表面から－100cmの海抜17.32mでＴ39の最下層でみられた黒色土(第６層)を確認した。遺構の時期は、埋土の状況から推察すると古代以前と考えられるが、図示した須恵器の高杯86が第３層から出土している以外には時期のわかるものが少なく明らかでない。Ｔ41は現地表面から－38cmの海抜17.46mで流路の東肩を検出した。また、第６層が粗砂層で第８層もグライ化が顕著であることから、検出した流路以前にも氾濫原であったと推察される。出土遺物がないため流路の時期は明らかでない。Ｔ42では遺構面、遺物は確認されなかった。現耕作土以下はマンガンや鉄分の多い粘質土が厚く堆積しており、水田化される以前は湿地状を呈していたと推察される。Ｔ43は昭和40年代に敷田地区より南側で行われた圃場整備の際に同時に整備が行われており、現地表面から－40cmで旧耕作土を確認した。旧耕作土以下は、調査停止面の約－120cmの深さまで灰色系の粘質土が薄く堆積している。これらの層は砂を含んでいる層もみられることから洪水層と水田層の互層と判断され、過去数回にわたって洪水に見舞われていると推察される。

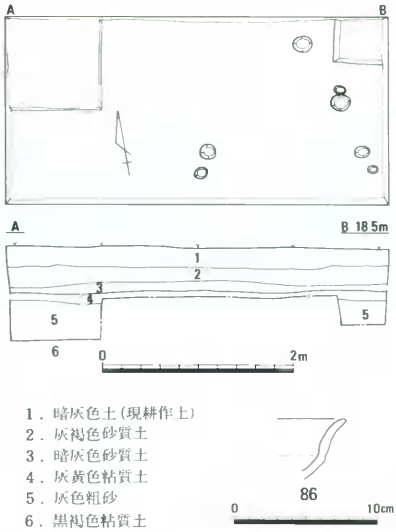
Ｔ44（第48図、図版５）　浅後地区の東端に東西軸で設定した。現地表面から約－20cmで暗褐灰色土の第３層を確認し、これ以下の第４～６層も同質の土で西から東へ傾斜して堆積している。この堆積土はＴ29で確認した堆積土に非常に近似しており、本トレンチの西側の集落の営まれている自然堤防上からの流出土と推察される。しかしながら、この堆積が自然堤防の斜面部分の自然堆積なのか溝状の遺構の堆積土なのかは明らかでない。ただ、このすぐ東側には小字の境界になっている南北方向に流れる用水があり、第６層が集落に近い西側部分のみグライ化していることを考えると、遺構の埋積土である可能性も否定でない。87・88は亀山焼の鉢と甕で、第３・４層から出土した。

Ｔ45・Ｔ46（第49・50図）　柳原地区に東西軸で設定した。Ｔ45は現地表面から－45cmの海抜約15.9mでしまりのよい砂質土層がみられたが、遺構は確認されなかった。この層より上には細砂層の第５層がみられ、この層の上面からピットが掘削されている状況が、土層断面で観察される。出土遺物がないため時期は明らかでないが、周辺の状況から近世以降と推察される。Ｔ46も現耕作土以下は砂や砂質土が堆積しており、Ｔ45同様に氾濫原であったと推察される。

Ｔ47（第51図、図版５）　上原．福島地区に東西軸で設定した。現地表面から－62cmの海抜15.7mで砂礫層を確認した。この上層には微砂質土が堆積しており、氾濫原であったと推察される。

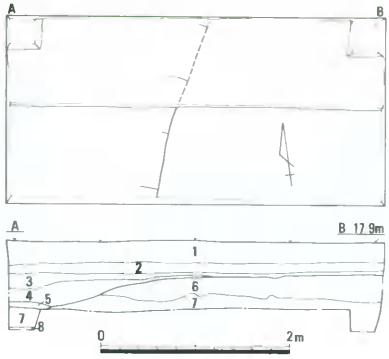
Ｔ48・49（第52・53図、図版５）　細野地区に東西軸で設定した。Ｔ48では現地表面から－17cmの海抜16.24mでピットが掘り込まれている。出土遺物がないため時期は明らかでない。また、海抜約16.1m以下は暗灰色粘質土の第７層が堆積しており、下層にいくほど黒色が強くなる。しかしながら、近接するＴ49では第７層に対応する土層は確認されず、かわって第６層に対応できる層が海抜約15.5m以下まで堆積している。このことから本地点の地形は東へ下がっていき、第７層の状況から湿地状を呈していたと推察される。

Ｔ50（第54図、図版５）　Ｔ26で遺構が検出されたため、この遺構面の広がりを確認するため梅木地区の西端に東西軸で設定した。その結果、遺構面は現地表面から－47cmの海抜19.93mと－70cmの19.7mの２面を確認した。遺構の時期は出土遺物が少ないため明確でない。下層の遺構面の直上とその上層の第８層に弥生時代から古墳時代後期の遺物がみられることから、下層は古墳時代後期ごろ、



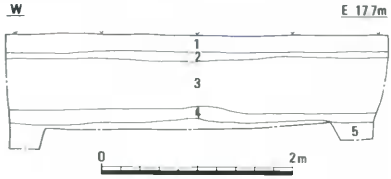
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰褐色砂質土
3．暗灰色砂質土
4．灰黄色粘質土
5．灰色粗砂
6．黒褐色粘質土

第44図　T40平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）



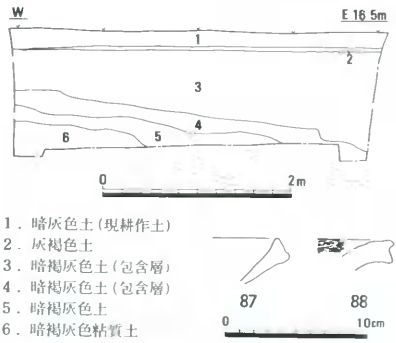
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色粘質土
3．灰色粘質土
4．灰色砂質土
5．灰色粗砂（流路埋土）
6．灰色粗砂（流路埋土）
7．黒褐色粘質土
8．青灰色粘質土

第45図　T41平・断面（1/60）



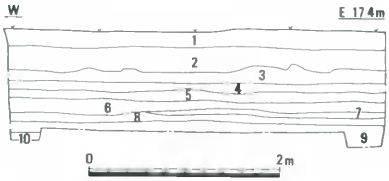
1．暗灰色土（現耕作土）
2．にぶい黄褐色粘質土
3．褐灰色粘質土
4．黒褐色粘質土
5．灰色粘性砂質土

第46図　T42断面（1/60）



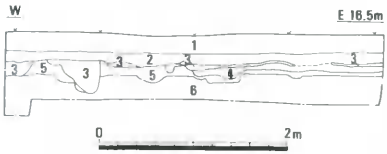
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰褐色土
3．暗褐灰色土（包含層）
4．暗褐灰色土（包含層）
5．暗褐灰色土
6．暗褐灰色粘質土

第48図　T44断面（1/60）と出土遺物（1/4）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．茶褐色土（造成土）
3．暗灰色土（旧耕作土）
4．暗灰色土
5．灰色粘質土
6．灰色粘質土
7．灰色細砂
8．灰色細砂
9．灰色粘性砂質土
10．灰色粘質土

第47図　T43断面（1/60）

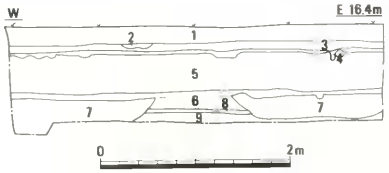


1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰褐色砂質土
3．白色細砂
4．褐灰色砂質土
5．灰色細砂
6．暗褐灰色粘性砂質土

第49図　T45断面（1/60）

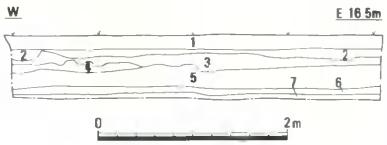
上層はそれ以降で中世ごろと推察される。図示した89・90は弥生時代中期の壺、91は中世の瓦質の亀山焼の擂鉢である。

Ｔ51（第55図、図版５）　Ｔ38で遺構が確認されたことから遺構の広がりを確認するために、松木地区の南部でＴ38のすぐ下の水田に南北軸で設定した。その結果、Ｔ38で遺構の築かれた層に対応する層位は確認されず、本地点がすでに松木地区中央の谷にむかって下がる斜面部にあたると判断された。しかしながら、現地表面から－100cmの海抜20.64ｍで遺構面を確認した。この遺構の時期は出土遺物がわずかなために明らかでない。図示した弥生時代中期の壺92は第12層、奈良時代の須恵器杯身93は第８層から出土した。このことから、遺構の時期は弥生時代中期以降と推察される。また、第６層上面から掘り込まれた攪乱層と判断した第５層は粗砂の中にマンガン分の沈着層が見られ、水田に



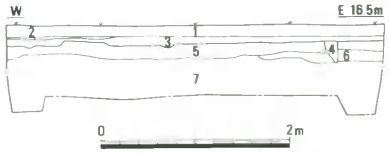
1．暗灰色土（現耕作土）
2．褐灰色砂質土
3．褐灰色微砂
4．白色微砂
5．暗褐灰色砂質土
6．暗褐灰色粘性砂質土
7．白色細砂
8．暗褐灰色粘性砂質土
9．にぶい黄褐色細砂

第50図　Ｔ46断面（1/60）



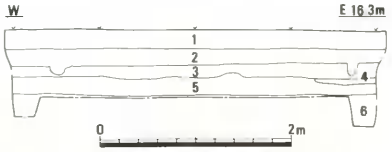
1．暗灰色土（現耕作土）
2．灰色土
3．褐灰色砂質土
4．褐灰色砂質土
5．暗褐灰色砂質土
6．暗褐灰色粘性砂質土

第51図　Ｔ47断面（1/60）



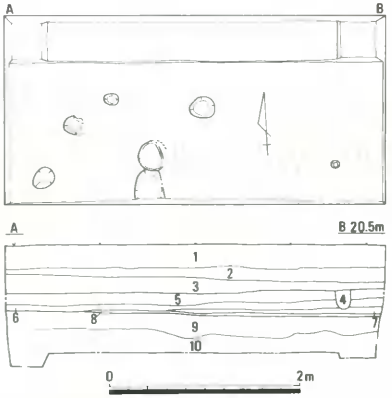
1．暗灰色土（現耕作土）
2．暗褐灰色土
3．灰褐色砂質土
4．灰色粘土（ピット埋土）
5．灰色粘質土
6．灰色粗砂
7．極暗灰色粘質土

第52図　Ｔ48断面（1/60）

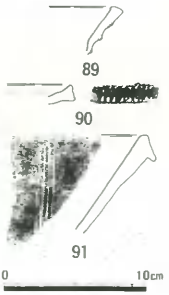


1．暗灰色土（現耕作土）
2．褐灰色土（旧耕作土）
3．灰褐色土
4．褐灰色砂質土
5．暗灰色粘質土
6．暗灰色粗砂

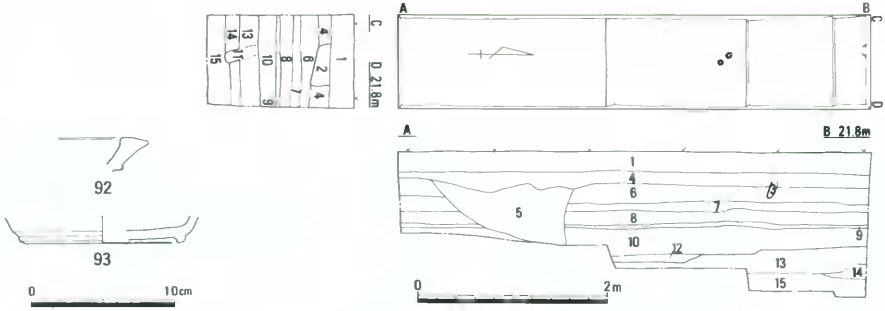
第53図　Ｔ49断面（1/60）



1．暗灰色土（現耕作土）
2．にぶい橙褐色砂質土
3．灰色細砂
4．褐灰色砂質土（ピット埋土）
5．灰褐色砂質土
6．褐灰色砂質土
7．黄褐色粘質土
8．灰色粗砂（包含層）
9．黒褐色砂質土
10．灰褐色粗砂

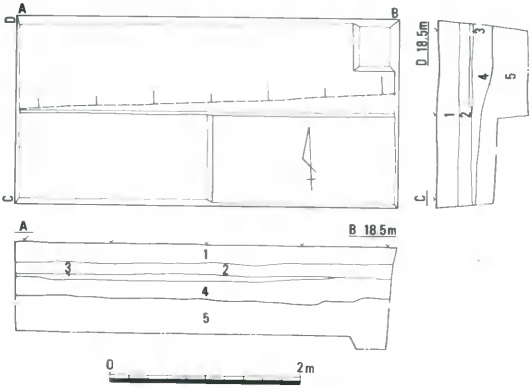


第54図　Ｔ50平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）



1．暗灰色土(現耕作土)
2．暗オリーブ灰色粗砂
3．灰色粗砂(ピット埋土)
4．灰褐色砂質土
5．攪乱層
6．灰白色粘性砂質土
7．褐灰色粘質土
8．暗灰褐色粘性砂質土(包含層)
9．暗褐灰色粘質土
10．灰褐色砂質土
11．にぶい橙褐色土(ピット埋土)
12．灰色粗砂(包含層)
13．橙褐色粘性砂質土
14．灰褐色粗砂
15．灰褐色微砂

第55図　T51平・断面（1/60）と出土遺物（1/4）



1．暗灰色土(現耕作土)
2．にぶい黄灰色粘性砂質土(包含層)
3．にぶい黄灰色粘性砂質土(包含層)
4．青灰色粘土(溝埋土)
5．黄灰色粘質土

第56図　T52平・断面（1/60）

関連する溝の可能性もある。

T52（第56図、図版５）　一本木地区で確認された微高地が、T16とT19でさらに南に広がる可能性が推測された。このため、微高地の広がりを確認するためにT16とT19の間の八反田地区に東西軸で設定した。その結果、現地表面から－32cmの海抜18.07mで流路と考えられる落ち肩を検出した。この肩は北へむかって緩やかに下がっていき、細砂の混じる粘質土の第３・４層で埋没している。埋土の第３層と第２層中には14世紀代の土師器がみられることから室町時代頃の流路と判断される。流路の下層には黄灰色粘質土(第５層)が厚く堆積しているが、微高地の堆積土と比べて灰色が強い。これは、上層の流路の影響でグライ化していると判断されるが、一本木地区の微高地堆積土とは若干土質が異なっており、微高地堆積土とは断定できない。しかし、第５層は調査停止面以下も50cm以上堆積していることを確認しており、この層が非常にしまりがよく安定していることを考え合わせると、微高地の一部と判断できると思われる。

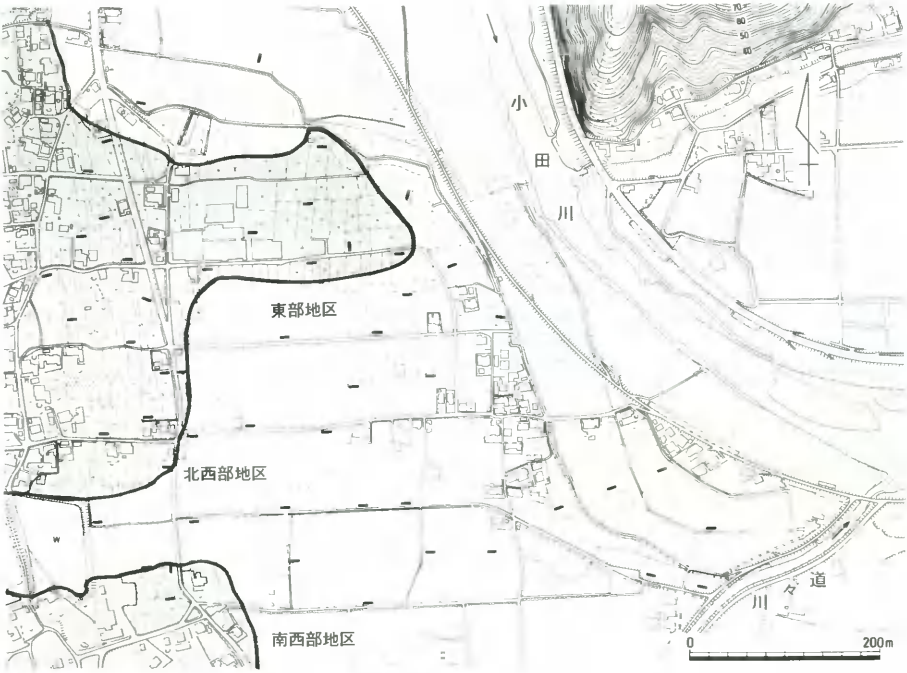
第4章　まとめ

今回調査した地点は、小田郡矢掛町里山田地内の北半に位置し、県営圃場整備事業の計画されている約33haのうち410㎡について52本のトレンチを設定して確認調査を行った。その結果、『岡山県遺跡地図』第三分冊(岡山県教育委員会　1975)に掲載され、周知されている上井・畑中・清水谷の各集落の遺物散布地の遺構の状況を確認するとともに、新たに小田川にむかって東に伸びた微高地を確認した。以下、これらの成果ににについてまとめる。

確認した遺構は弥生時代から中世にわたるもので、これらの遺構は第57図に示したように、大きく調査地西側の丘陵裾の緩斜面上に営まれたものと東部の微高地上に営まれたものの２つに分けることができる。さらに丘陵裾部については松木地区の中央の谷によって南北に別れる（第２図参照)。

北西部地区は、ほぼ現在の県道西側の丘陵斜面部に位置し、北は土田地区から南は松木地区北部までが範囲として相当する。本地点では、弥生時代から古代・中世にわたって営まれたと考えられるピット・溝・流路を検出した。包含層出土の遺物は多いが、遺構に共伴する遺物が少ないため詳細な時期が明確でない。遺構は土田(Ｔ２・Ｔ３)・柚ノ木地区(Ｔ６・Ｔ７)と流田地区北部(Ｔ26)・梅木地区西部(Ｔ50)の尾根線上と、松木地区北部(Ｔ31)の谷地の３地区に集中してみられる。

南西部地区は松木地区南部(Ｔ38・Ｔ51)が相当する。Ｔ38を設定した地区は、西側の丘陵から延び



第57図　遺跡推定範囲（1/6,000）

る尾根の先端部にあたり、古墳時代後期ごろの竪穴住居や土壙・掘立柱建物を確認した。本地点より南には古墳時代の集落が確認されている里山田下谷遺跡が広がっており、今回検出した遺構もこれらに関連するものと考えられる。また、Ｔ38の遺構面の上層やＴ37で形成されていた包含層から、本地点西側の尾根上には、弥生時代以降の遺構が存在していると推察される。

次に東部地区は、今回の調査で新たに確認した丘陵尾根線から延びると考えられる微高地である。この微高地は、一本木地区（Ｔ５・Ｔ９・Ｔ10・Ｔ18）・八反田地区（Ｔ19・Ｔ52）が相当し、弥生時代から室町時代の土壙・溝・ピット等を検出した。Ｔ10で検出した溝の中からは弥生時代前期後半の土器が比較的多く出土した。また、Ｔ18では竪穴住居の中央穴と推察される土壙から、多量のサヌカイト製の剝片・石屑とともにメノウ製の石屑やチャート製の石屑も出土しており、石器の製作だけでなく玉の製作も行っていた可能性があり、本地域の弥生時代における他地域との交流や遺跡の性格を考えるうえで重要である。さらにＴ９では現耕作土直下に室町時代の整地層を確認し、この整地面から掘り込まれた同時期の土壙を検出した。このことから、この周囲に建物等の遺構がつくられている可能性は高い。微高地の範囲は、遺構の検出状況や土層の堆積状況、現地形から北限はＴ５まで、東限はＴ11のの西までである。また、南限はＴ19・Ｔ52でピットや流路を検出しているが、あまり判然としない。しかしＴ22では遺構も確認されないことから、Ｔ19とＴ22の中間あたりまでと推察される。北限については工場や宅地で調査できていないが、柚ノ木地区のＴ８で微高地堆積土に近似した層を確認していることからおそらく北西部地区と重なると推察される。しかしながら、Ｔ９で弥生時代前期の遺構が営まれた面が現地表面から約－90cmと急激に下がっていっており、東部地区と北西部地区の間に流路が存在し、別れる可能性はある。以上のことから、微高地の規模は南北約16m東西は県道までで約28mと想定される。

これらのほかに、敷田地区のＴ40やＴ41ではピット・流路を確認しているが、時期が明確でなく遺跡の範囲としては不明だが、南西部地区の延長にあたることから注意を要するだろう。また、土生の集落近くはＴ29やＴ44で自然堤防と考えられる状況を確認していることから、集落全体が遺跡として理解できると考えられるが、今回の調査では遺構が検出されていないので断定はできない。

以上、今回の調査で遺構が検出された地点について簡単にまとめたが、これら以外の地区は小田川や道々川の氾濫原や後背湿地であったようで、トレンチでは広く砂層や砂礫層あるいは黒色の粘質土を確認した。しかし、確認調査を行った面積は調査対象面積のわずか0.1％に過ぎず、確認できた遺跡の範囲はあくまでも推定であることは十分理解しておく必要がある。また、調査した深さも地表面から－１～－1.5mで、遺構を確認できていない地点でも、深い位置には古い時期の遺構面が存在する可能性は大いにある。実際Ｔ21では縄紋時代晩期の土器が摩滅することもなく出土しており、近くにこの時期の遺構が存在する可能性を示唆している。

最後に、遺跡の名称について触れておく。今回調査した地区は、調査に先立って集落名を冠して「清水谷遺跡ほか」と遺跡名を付けて調査・報告を行った。しかし、集落名を冠した場合、一本木地区のように集落から離れた地区では遺跡名を付ける際に支障が生じる。これを避けるため、岡山県では慣習的に小字名を冠して遺跡名をつけている。今回の場合も「清水谷遺跡ほか」の名称を変更して小字名を冠して新たに名称をつけるべきであったが、遺構の存在する小字が多くあり、繁雑になる恐れがあったため、この報告書では遺跡名は変更せず、小字の地区名を用いて記述した。正式に遺跡名を付けるのは今後の調査によって、改めて考えていく必要があろう。

第1表　トレンチ調査概要一覧表

調査区		遺構・包含層				工事予定出来高(m)	遺物		備考
名	地区名	面数	種類	深さ(cm)	海抜高(m)		量	時代	
T1	中原	0				17.0	△	近世	
T2	上田	1	ピット	28	19.58	21.2	○	弥生～中世	
T3	上田	2	ピット	35	20.96	21.6	◎	弥生～中世	
T4	上田	0		44	16.34	16.7	○	弥生～近世	
T5	一本木	2	ピット	37	17.8	17.1	△	弥生	
T6	柚ノ木	1	ピット	24	22.32	22.5	◎	弥生～近世	
T7	柚ノ木	1	ピット・溝	25	21.55	21.7	○	弥生～近世	
T8	柚ノ木	2	ピット・流路か	28	20.18	21.7	○	弥生～古墳	
T9	一本木	4	ピット・土壙	20	18.3	18.3	○	弥生～中世	中世祭祀土壙
T10	一本木	2	ピット・溝	21	18.18	18.3	◎	弥生～古墳	
T11	一本木	0				17.6	△	弥生～近世	
T12	岡崎	0		38	24.06	26.4	◎	弥生～近世	分銅形土製品
T13	岡崎	1	ピット	20	23.85	24.4	○	弥生～古墳	
T14	岡崎	1	ピット	23	21.43	21.6	○	古墳～近世	
T15	岡崎	1	流路	34	20.25	21.6	○	弥生～中世	
T16	八反田	0				19.5	×		
T17	八反田	0				18.3	△	古墳～中世	
T18	一本木	1	住居か・ピット	18	18.05	17.6	○	弥生～中世	石器製作跡
T19	八反田	2	ピット	28	17.86	18.1	△	弥生～中世	
T20	一本木	0				16.7	△	弥生	
T21	八反田	0				18.1	◎	縄文～古代	突帯文土器
T22	八反田	0				18.1	○	弥生	
T23	一本木	0				16.3	△	弥生	
T24	流田	0				24.0	△	近世	
T25	流田	0		48	21.23	22.7	△	弥生～中世	
T26	流田	1	ピット	50	20.56	22.7	○	弥生～中世	
T27	梅木	0				18.3	△	中世	
T28	梅木	0				17.9	△	弥生	
T29	梅木	0				17.9	×	古墳～中世	
T30	松木	0				23.8	△	弥生～中世	
T31	松木	1	ピット・流路	100	20.7	22.1	△	古代～中世	
T32	浅後	0				19.4	△	弥生	
T33	浅後	1	流路か	58	18.0	18.2	△	古墳～近世	
T34	浅後	0				18.2	△	中世	
T35	浅後	1	流路	50	17.3	17.8	△	古墳～近世	
T36	浅後	0				17.8	×		
T37	松木	0		28	21.84	24.3	◎	弥生～中世	
T38	松木	1	住居・柱穴列等	61	21.88	22.4	◎	弥生～中世	
T39	敷田	1	流路	40	19.74	20.1	△	弥生～古墳	
T40	敷田	1	ピット	44	17.88	18.2	△	古代～中世	
T41	敷田	1	流路	38	17.46	17.7	×		
T42	敷田	0				17.7	×		
T43	敷田	0				17.25	△	弥生～古墳	
T44	浅後	0		20	16.18	16.2	△	古代～中世	
T45	柳原	1		30	16.04	16.4	×		
T46	柳原	0				16.4	△	近世	
T47	上原．福島	0				16.3	×		
T48	細野	1	ピット	17	16.24	16.2	×		
T49	細野	0				16.2	△		
T50	梅木	2	ピット	47	19.93	19.9	○	弥生～中世	
T51	松木	1	ピット	100	20.64	22.4	○	弥生～中世	
T52	八反田	1	流路	32	18.07	18.3	○	中世	

1．「遺構・包含層の深さ」「遺構・包含層の海抜高」はいずれか一方の最高所の高さを示す
2．「遺物量」は整理箱半分以上を◎、整理箱1～3程度を○、それ以下を△で示す
3．「遺物の時代」は出土した遺物の時期を示す

第2表　土製品一覧表

掲載番号	種　別	出土トレンチ	計測値（mm・g）				残存	備　考
			長さ	幅	厚さ	重量		
C 1	分銅形土製品	T12	60.0	88.5	12.0	68.08	1/2	表面摩滅顕著
C 2	円板形土製品	T37	43.0	46.5	4.5	10.87	完形	弥生土器甕体部片転用、打ち欠き整形

第3表　石器一覧表

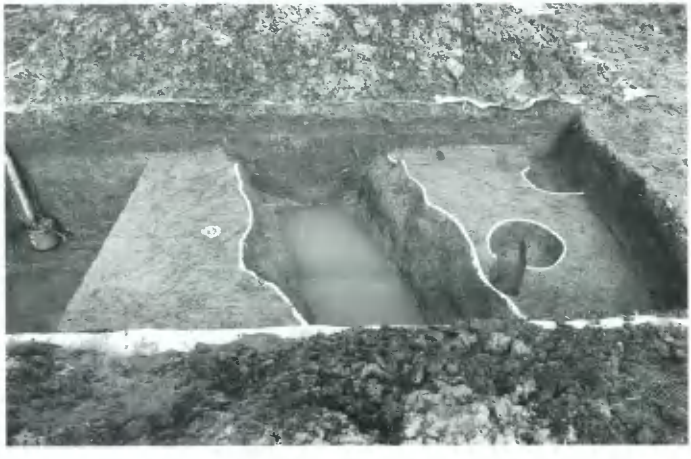
掲載番号	器　種	出土トレンチ・遺構	石　材	計量値（mm・g）				残　存	備　考
				長さ	幅	厚さ	重量		
S 1	鏃	T 2	サヌカイト	22.0	15.0	2.8	0.88	先端・脚欠	
S 2	楔か	T 3	サヌカイト	41.0	23.5	7.5	6.92	ほぼ完形	
S 3	楔	T 3	サヌカイト	37.5	39.0	11.5	19.49	ほぼ完形	
S 4	スクレイパー	T10・溝	サヌカイト	58.0	29.5	8.5	11.20	ほぼ完形	
S 5	鏃	T10・溝	サヌカイト	16.0	12.0	4.0	0.60	ほぼ完形	
S 6	鏃	T10・溝	サヌカイト	26.5	18.0	5.2	2.00	完形	
S 7	楔	T10・溝	サヌカイト	35.5	17.0	8.5	4.86	ほぼ完形	
S 8	錐	T10・溝	サヌカイト	24.0	15.0	4.5	1.25	先端欠	
S 9	鏃	T15	サヌカイト	27.0	18.0	3.8	1.71	脚欠	
S10	鏃	T18・P 1	サヌカイト	27.0	14.5	5.0	1.18	完形	
S11	鏃	T18・P 2	サヌカイト	22.0	14.5	4.2	0.68	脚欠	
S12	鏃	T18・P 2	サヌカイト	23.0	16.0	4.5	1.01	ほぼ完形	
S13	鏃	T18・P 2	サヌカイト	14.5	14.0	2.5	0.50	脚欠	未製品か
S14	錐	T18・P 2	サヌカイト	20.0	11.5	4.0	0.83	完形	
S15	錐	T18・P 2	サヌカイト	27.5	11.5	6.0	1.72	つまみ欠	先端摩滅
S16	錐	T18・P 2	サヌカイト	31.0	17.5	5.0	2.43	完形	先端摩滅
S17	錐	T18・P 2	サヌカイト	33.0	12.5	7.5	3.04	完形	先端摩滅
S18	楔	T18・P 2	サヌカイト	24.5	7.5	5.0	0.98	破片	
S19	楔	T18・P 2	サヌカイト	11.0	22.5	9.0	2.35	破片	
S20	鏃	T26	サヌカイト	17.5	14.0	3.2	0.58	先端・脚欠	
S21	楔	T26	サヌカイト	25.0	31.5	9.5	9.39	一部欠	
S22	鏃	T28	サヌカイト	28.5	14.0	3.4	0.93	完形	
S23	不明	T30	不明	45.5	26.0	11.5	11.96	破片	表面研磨
S24	スクレイパー	T39	サヌカイト	66.5	67.0	9.5	38.85	完形	有柄
S25	スクレイパー	T39	サヌカイト	29.5	25.5	7.0	6.58	完形	

第4表　鉄器一覧表

掲載番号	器　種	出土トレンチ	計量値（mm・g）			残　存	備　考
			長さ	幅	重量		
I 1	鑿	T 9	73.0	10.05	13.40	先端のみ残存	錆化顕著

1. 調査地遠景 ①
(北西から)

2. 調査地遠景 2
(北東の茶臼山城跡から)



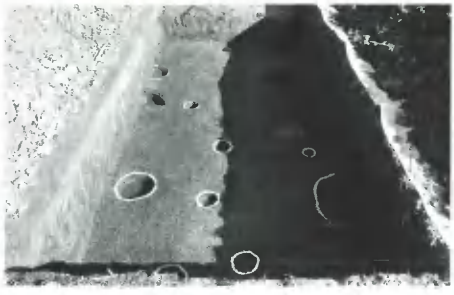
3. T10 (南から)

図版２

１．T10溝
土器出土状況
（南西から）

２．T18（西から）

３．T38（西から）



１．Ｔ２（西から）

２．Ｔ３（東から）

３．Ｔ４（南から）

４．Ｔ５（西から）

５．Ｔ６（東から）

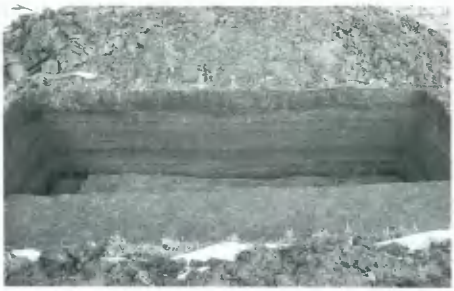
６．Ｔ７（南から）

７．Ｔ９（南から）

８．Ｔ14（東から）

図版４

１．T15（南西から）



２．T16（南から）

３．T20（南から）

４．T26（西から）

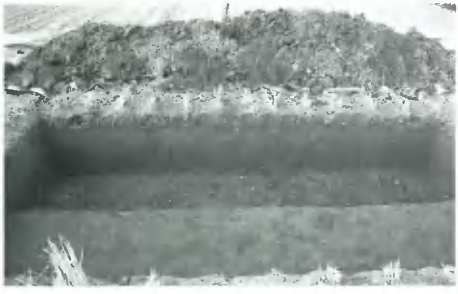
５．T31（西から）

６．T35（南から）

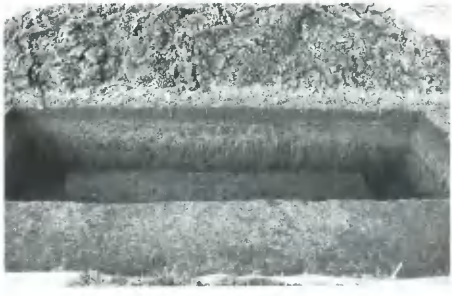
７．T40（南西から）

８．T41（南から）

１．T44（南西から）



２．T47（南から）



３．T48（南西から）

４．T50（南から）

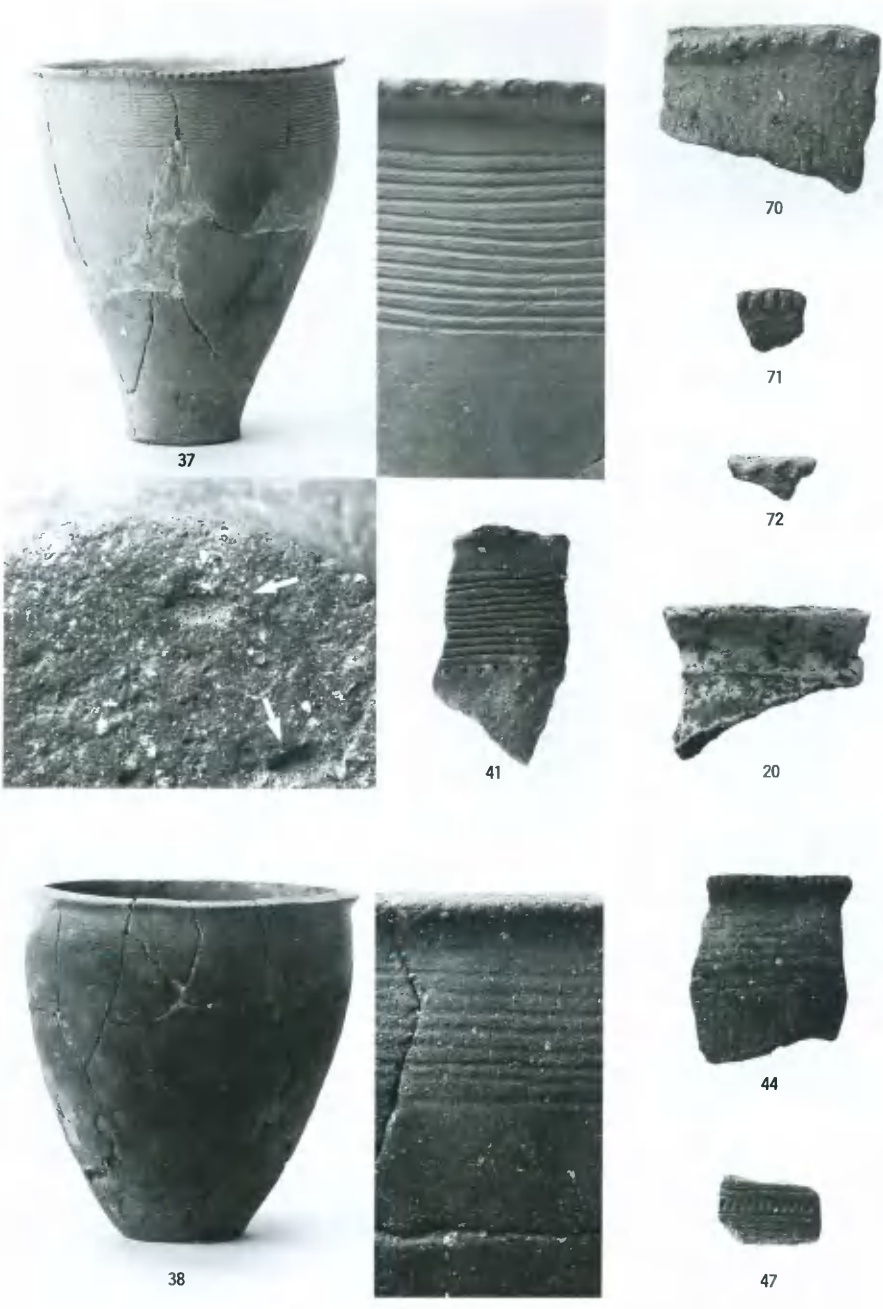
５．T51（南から）

６．T52（東から）

７．発掘風景

８．埋戻し風景

図版６



出土土器①（37・38の立面 1/4、部分拡大 任意、その他 1/2）

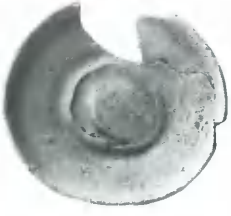
50

22

54

35

58



80

29

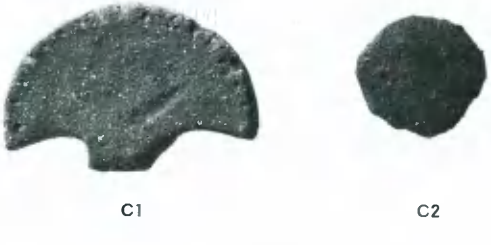
30

63

出土土器 2 (1/2)

図版８

１．出土石器（2/3）



２．出土土製品（1/2）

３．出土鉄器（1/2）

報告書抄録

ふりがな	しみずだにいせきほか
書名	清水谷遺跡ほか
副書名	県営矢掛町圃場整備事業に伴う確認調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	134
編著者名	杉山一雄
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦 1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
清水谷遺跡ほか (しみずだにいせき)	岡山県(おかやまけん) 小田郡(おだぐん) 矢掛町(やかげちょう) 里山田(さとやまだ)	33461		34° 36′ 39″	133° 35′ 47″	1997.11.04～ 1998.01.29	410	県営圃場整備事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水谷遺跡ほか	集落	縄紋時代 ～ 江戸時代	竪穴住居・土壙 柱穴・溝・流路	縄紋土器・弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・肥前陶磁器・輸入磁器・土製品(分銅形・円板形)・石器(鏃・錐・楔・スクレイパー)・鉄器(鑿)	石器製作跡

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告134

清水谷遺跡ほか

県営矢掛町圃場整備事業に伴う確認調査

平成10年3月27日　印刷
平成10年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　西日本法規出版㈱